556
157

猪・鹿・狸

早川孝太郎著

郷土研究社第二叢書 4

帝國圖書館藏

556-157

凡　例

一　猪と鹿と狸と、それ〴〵に因縁や連絡があつた譯では無い。

一　話に出て來る地名で、單に村の名だけを記して、郡名を省いたものは、南設樂郡内の事である。

一　村の名を言ふ場合に、例へば長篠村淺畑とか、鳳來寺村峯とある類は、多くの場合、その間へ、大字の文字が入る事である。然し中には、昔の話のまゝに、現在の行政區劃を無視したものもあつた。郡名と小字を言うた類のものである。

一　大字の名を省いて、村名と小字だけのものもあつた。又鳳來寺山東方にある何々の部落の如く、村名を省いたものもあつて、一定して居ない。

多くは話の感じに重きをおいてやつた爲である。まるきし不明の點もあるまいと思ふが、反つて煩はしくなつた事は恐縮の他ない。

一　地名の讀方は、大抵一回だけ振假名を附けて置いた。中には重複したものもあるやうで目觸りである。或は又、當然必要が無いと思ふもので、そのまゝ置いたものもある。

一　話の年次は今から何年前といふ風のものは、現在を基準としたのである。明治何年頃と言ふ類は、多く自分が推定したものである。

一　話の順序と標題は、内容に據つたものではない、多く感じの上の分類で中には同じ標題の中に、異つた幾つもの話を入れた處がある。

一　カットは自分のスケッチに據つて描いたのであるが、中には全然想像で描いたものもある。

目次

凡例

猪

一　狩人を尋ねて……一頁
二　子猪を負んだ狩人……五
三　猪の禍ひ……八
四　猪垣の事……一三
五　猪の案山子……一六
六　村の變遷と猪……二一
七　猪除けのお守……二四

八　空想の猪……二八
九　猪の跡……三一
一〇　猪に遇つた話……三四
一一　猪狩の笑話……三八
一二　昔の狩人……四二
一三　山の神と狩人……四五
一四　猪買と狩人……四九
一五　猪の膽……五二
一六　手負猪に追はれて……五六
一七　代々の猪撃……六〇
一八　不思議な狩人……六三
一九　巨猪の話……六七

鹿

一　淵に逃げこんだ鹿……七一
二　鹿の跡を尋ねて……七五
三　引鹿の群……七八
四　鹿の角の話……八二
五　鹿皮のタツ、ケ……八六
六　鹿の毛祀り……八九
七　山の不思議……九二
八　鹿に見えた砥石……九五
九　鹿撃つ狩人……九八
一〇　十二歳の初狩……一〇二

二 一ッ家の末路……一〇五
二 鹿の玉……一〇九
三 淨瑠璃御前と鹿……一一二
四 親鹿の瞳……一一六
五 鹿の胎兒……一一九
六 鹿捕る罠……一二一
七 大蛇と鹿……一二五
八 木地屋と鹿の頭……一二九
九 鹿の大群……一三一

狸

一 狸の怪……一三五

二 狸の死眞似……一三八
三 狸の穴……一四一
四 虎挾みと狸……一四五
五 狸を拾つた話……一四七
六 砂を振りかける……一五〇
七 狸と物識り……一五二
八 狸の火……一五五
九 呼ばる狸……一五八
一〇 眞黑い提灯……一六〇
一一 鍬に化けた狸……一六四
一二 狸か川獺か……一六七
一三 娘に化けた狸……一六九

一四　狸の怪と若者……一七二
一五　塔婆に生首……一七五
一六　緋の衣を纏つた狸……一七九
一七　狸寄せの話……一八二
一八　狸と印籠……一八六
一九　古茶釜の話……一九〇
二〇　古い家と昔話……一九四
二一　狸の最後……一九八
跋……二〇一

猪

一　狩人を尋ねて

早三四年前にもなるかと思ふが、狩の話が聽きたくて、以前狩人だつた男を尋ねて行つた事がある。前から知らぬでもなかつたが、前身が狩人の事は、遂少し前に初めて知つたのである。

住僧だつたが、今日は山田へ田繕(たなほ)しに行つたと家人の言葉を聞いた時は、ちよつと落膽したが、更に其田を訊いて出掛けて行つた。街道から山道にかゝつて二三町進むと、窪を越した向ふに、柴山をひどく切崩した址が見えて、直ぐ判つた。

狩人を尋ねて

新しく畔を築いて、幾段にも出來た新田の一ッに、腰が弓のやうになつた白髪の男が、餘念なく土を篩つてゐる。傍には頑丈な手押車が置いてあつた。兼て耳の遠い事は聞いてゐたので、傍へ寄つてから大きな聲で來意を告げると、初めは何とも合點のゆかぬ顏付であつたが、段々話す内、得心が着いたかニヤ〳〵と相恰が崩れた。軈てビックリするやうな聲で笑つてから、そんな事が何かの役に立つかと言うて、更に愉快さうに笑つて直ぐ話し出した。

十六の年から猪追ひをやつたさうである。そして近間の山と云ふ山は悉くあるき盡して、時には遠く伊勢路迄入込んだ事もある。或年奥郡（渥美郡伊良胡崎）に猪が澤山居る話を聞いて、朋輩と二人で出かけた時の事、赤羽根の海邊を鐵砲舁いで歩いて行くと、岸から僅か離れた岩の上に、鵜が零れる程止つてゐたさうである。そこで慰み半分に一發放して見ると、鳥は驚いて一時に飛立つたが、其の内一羽は海の中へ轉げ落ちた。そして波にブカ〳〵浮んでゐるのだが、二人共山猿の悲しさにどうする事も出來なんだ。その儘見捨てゝ行かうとすると、近くの畑で樣子を見てゐた男が飛んで來て、デシ殿あれは不用ぬかいと云うて、ザンブリ海へ飛込んで拾つたさうである。デシとは此附近で專ら狩人を呼ぶ言葉であつた。

此話を聽いてゐると、春先き日のポカ〳〵當つた海邊を、呑氣さうに歩いてゆく狩人の姿が見えるやうである。狩人の中には、居廻りの山谷ばかり守る事をせず、獲物を索めては山から山を渡り歩いて、ホンの僅かの間しか家に還らぬ者もあつたのである。

今年七十七だと言うたが、十數年前四十幾年の狩人生活をフツ、リと斷つて、たゞの農夫に還つて老先を田地の改良などやつて居たのである。實は狩ほど面白い仕事は無かつたと言ふ。いくら八釜しく言はれても、耕作などとても辛棒が出來なんださうである。さう言うて居るだけ、ひどく謙遜した回顧談であつたが、

愉快な事はその老人が、諦めたなどゝ言ひながら、話の間の手に此方が語る他國の狩の事を、珍らしがつて聽かうとする態度であつた。その晩更に家へ訪ねると、一人で茶を汲んだり菓子を出したりして、歡待してくれた。そして若い頃獲た大鹿の皮で、自身が縫つたと云ふタッ、ケの、ボロ〳〵に綻びたのを納戸の隅から捜し出して見せてくれた。鐵砲も早賣つてしまつて、殘る物はもうこれだけだと言うた。

斯うして猪狩の話も、納戸の隅に置忘れたタッ、ケの如く、既に過去の物語に成りつゝあつたのであるが、一方對手の猪は、未だ盛に出沒して居たのである。現に此老人の耕しつゝあつた田の稻も、年毎に荒されつゝあつたのは、矛盾だか皮肉だか判らなんだ。

二　子猪を負んだ狩人

これは自分が七ッ八ッ時分の事だつたと思ふ。その日は何かの用事で父が遠出した留守で、母と幼い同胞達と一間へ魂り合つて寢た。山村の事で早薄ら寒い程の秋であつた。丁度一眠りしたと思ふ時分、門の戸口をコト〳〵と叩く音に目を醒した。先に目を醒してゐた母が先づ聲を掛けたが、外には聞へぬらしかつた。二三度續けて問返す内、漸く隣村の狩人と判つてホッとした。用向を訊くと、今しがた奥の窪でコボウ(子猪)を一つ撃つたのだが、家迄運ぶ間ショイタを借り度いと言ふのである。母が土間の隅から取出して、戸口を開けて渡してやると、其儘急いで立去つたが、自分は思ひ懸けぬ經驗に昂奮して容易に眠られなかつた。その内又もや戸口を叩く音がして狩人が歸つて來た。今度は直ぐ起出して母を促して一緒に外へ出た。遉がに物珍らしく心を惹かれたのである。夜目に瞭然と見

へないが、暗がりにショイタを負つて立つてゐる男の肩に、何やら突立つてゐるのが、猪の肢でもあるのか、倒さにして結へ着けてあるらしかつた。

何でも宵待ちに行つて、田の畔（くろ）のボタに踞んでゐたと言ふ。すると上の柴山からボソリ〳〵降りて來るのが、星空に透して見ると、大小二ツの紛れも無い猪だつた。大凡狙ひを附けて撃つと、つい目の前へ草を分けて轉がつて來たさうで、親猪の方は遂に取逃したと言ふ。其處は自分の家の田圃の傍で、判然記憶にある場所だつた。田の脇を徑が通つてゐて、傍に三ツ又の杉の古木が立つてゐた。田植の折には、定つてその蔭で晝飯を喰べた所である。狩人は一通り話し了ると、新しく煙草を喫ひつけて、幾度かショイタの禮を述べて、前の坂道を降りて行つた。今考へると夢のやうな光景である。

其男は龜さとか言ふ名前で、狩人仲間でも豪膽者だとは聞いてゐた。いつも相棒になる同じ村の若い狩人が、ひどい臆病者で、猪を見かけて逃げてばかりゐるのに、此男のお蔭で旨い目に遇ふとも言うた。曾て村の某の老爺が、山田の猪小屋で鳴子の綱を引いてゐると、入口の垂莚を默つて持上げて、オツトウ今夜は俺が番をせるぞへと言うて、ひどくビツクリさせたさうである。以前からの強い狩人は悉く死んでしまつて、夜の夜中に一人山の中を歩き得るのは、もう彼の男一人だとも言うた。

猪小屋

それ程の男でも、大切にしてゐた犬が、山で何物かに喰殺された時は、三日三晩も泣き通したさうである。赤毛の極く賢い犬で、主人が狩に出ぬ日でも、一日に一度は必ず山へ入つて、兎か狸かを捕つ

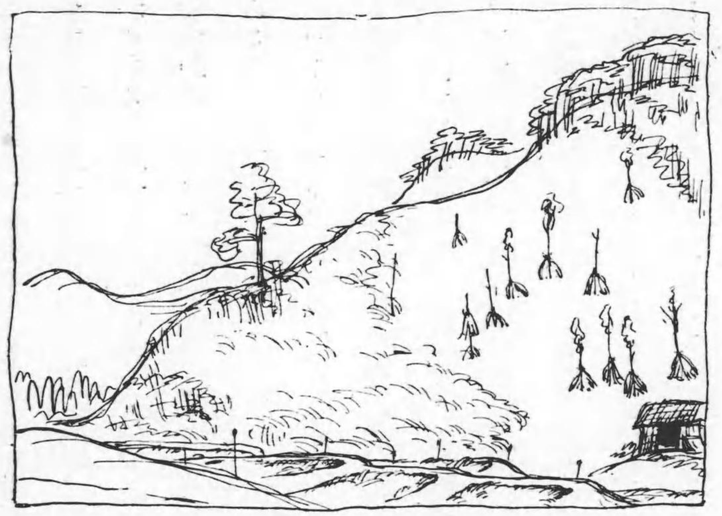
于猪を負んだ狩人

て來た。或時三日も續けて姿を見せなんだ。そこで近所の者を賴んで、彼方此方搜すと、岩山の大きな石の蔭に、咽喉を喰破られて死んでゐたさうである。大方狸かなんぞの、劫を經た物の仕業であらう、餘り澤山の獲物を捕つた報いだらうとも言うた。その事以來道がの豪膽者も急に老込んだと聞いたが、今でも多分生きてゐるだらう、もう七十幾つの年配の筈である。

三　猪の禍ひ

秋になつて稻が色づく頃には、山田を耕してゐる者は一晩でも安閑としては居られなんだ。僅か許りの冷田の作代であるが、文字通り猪の襲來がはげしくて、絶えず脅かされて居たのである。收穫間近の煽られるやうな忙しい中を、日が落ちてからヤトオを幾十本となく刈いで、何でも今夜が危ないなどゝ、暗がりを辿つて、猪の路へ立てに行つた。或時父の後から、隨いて行つた事がある。彼の峯から來ると敎へられて、眞黑に茂つた雜木山を、不安な目で仰いだものだつた。柴山から田のクロへ續く崖の下へ、矢來のやうに隙間なくヤトオを立てたものである。

ヤトオはヤトとも謂うて、矢竹の稍太い物を三尺程の長さに切揃へ、穗先を鋭く尖らせた物だつた。表の端で麥稈など焚いて、一本一本尖を炮つて、竹の脂肪氣を去つて鋭くしたのも、古くから續けて來た事らしかつた。ヤトオは本來オトシアナの中に立てゝ、陷ちた猪を突刺す爲の物の具であつたが、別に崖の下垣根の內等にも置いて、獲物を捕る事にも使つた。單に猪を嚇す爲めの、防禦の具に用ひたのは、せつない時の思付であつたかも知れぬ。それを作る矢竹の茂りが、山の處々に、未だ忘れたやうに殘つてゐた。



猪小屋

猪に荒された後の稻は、誠に情容赦も無い事だつた。わけて子持猪にでも出られたが最後、目も當てられぬ狼籍であつた。喰ふ以上に埃の中へ踏みにぢつて、偶々免がれた物は、稻扱(いなこき)にでも掛けたやうに、粒が悉く毟つてあつた。猪は穗の幾ツかを、一口に咥へて引たぐるらしかつた。空穗がヒヨロ〳〵風に吹かれて居るのを見て、思はず涙を零したとは、現に度々聽かされた事である。其上にも後の始末が、並大抵の面倒で無

かつた。それと見た隣の田では、未だ青い穗並を、ムザ〳〵刈取るさへあつた。燒米にしても、猪に喰はれるより增しだとも言うた。思へば憎い憎い猪だつた。晩方仕事の隙を見て、そつと狩人の家へ走つたのも、よく〳〵遣瀨なくての事である。

猪一ッ捕つてくれたら、酒の一升位出しても反つて有りがたいと、遂約束もしたのである。鳳來寺村長良(ながら)の一ッ家の話だつた。それからは狩人が猪を早いで來て表に休む度、酒一升分の價を拂ひ拂ひしたが、屋敷廻りの猪はちつとも減らないで、狩人達が飛でもない遠方から、わざ〳〵廻り路をして早いで來る事が判つて、慌てゝ約束を取消したと言ふ。

村の某の男だつた。屋敷脇の甘藷畑へ、毎晩のやうに猪が出て片つ端から甘藷を掘る。終ひには宵の口から來て居る。それで或晩鐵砲を用意して待つて居て、中りもすまいと思つて放したのが遂擊ち殺してしまつた。夜が明けて見て遺がに

當惑した。狐や兎などと異つて、三十貫もある物を、三人や四人の家内で、喰つて片附ける事も出來なんだ、ちよつと動かすにも男の手には餘る程で、賣る事は勿論、隣近所へ分けて與る事も、狩人達の思惑が案じられた。萬一警察へでも密告されたら、辛い目に遇ふに極つてゐる。現在さうした話を彼方此方で聞いて居た。散々頭痛にした果に、女房の緣故を辿つて、近間の狩人に情を明して引取つて貰つたが、それ迄二日二晩の間、猪の骸に莚を掛けて、畑の隅に匿して置いたと言ふ。でもその狩人から、幾千かの分前を貰つたが、えらい氣苦勞を考へると、滅多に猪も擊たれぬと零したゐた。

何れにしても厄介千萬な猪だつたのである。

四　猪垣の事

猪の出る路をウツと謂うた。猪は田や畑へ出るにも、必ずウツを通つたのでオトシアナはウツを目がけて設けたのである。自分が子供の頃には、畑續きの木立の中に、半ば崩れかけたのが、未だ幾ケ所も殘つてゐた。多く畑から數間若しくは十數間位入込んだ所で、穴の直徑六尺位で、深さは二間もあつた。朋輩の一人が、過つて墜ちて弱つた事がある。

オトシアナは猪を防ぐ爲に設けたのであつたが、一方それで猪を捕る狩人もあつた。上に細い横木を渡して、萱薄などを敷いて置き、底にはヤトを一面に立てゝ置いた。老人の話に據ると、同じ狩人の中でも腕に自慢の者がやる事では無かつた。捕れた獲物も多くは子猪ばかりで、親猪は滅多に掛らなんだと言ふ。子猪の事を別にウリンボウと云うたが、ウリンボウがヤトに旨く掛つた處は、盆の精

靈送りに、瓜に麻稈を通した其儘であつたと言ふ。之は祖母から聞いた話であつた。或時隣家のオトシアナへ、巨猪が陷ちてヤトを三本も負ひながら、旺んに荒れて居て困つた事があつた。近所の者が集つて石撲にしてやつと斃したと謂ふ。どこの家でも屋敷の後には、きまつてオトシアナが設けてあつたのである。

オトシアナへは猪の他に、勿論他の獸も掛つたが、特に山犬の陷ちた話が遺つて居る。もう四十五六年も前であるが、鳳來寺山麓の吉田屋某の裏手の穴へ陷ちた事があつた。村の者が多數集つて藤蔓の畚(もつこ)を作つて、其四隅に長い綱を附けて穴の中へ下げてやると、山犬がそれに乘つたと謂ふ。それで早速引揚げて遁してやつた。翌日その穴へ大鹿が落し込んであつたのは、言ふ迄もなくお禮心であつた。山犬がオトシアナへ陷ちた時は、中で盛に吠えたと謂ふ。自分の家の地類である某の男は、豪膽で聞えた狩人だつた。或時屋敷裏のオトシアナへ山犬が掛つた時、中へ梯子を下して降りて行つて、山犬を片手に抱いて上つて來た。そのまま放してやると、犬は嬉しさうに尾を振つて其場を去つたが、並居る村の者も某の豪膽には魂消げたと言ふ。山犬が少しも抵抗せなんだのは、最初ムズを含めた爲だと言ふが、ムズの事は判然と知らぬ。或は抵抗せぬ爲の呪とも謂うた。明治になる少し前の事で、翌日大鹿が投込んであつた事は、前の話と同じである。

話の枝が餘計な方向へ伸びてしまつたが、オトシアナとは別に、田や畑を繞つて、深い堀が穿つてあつた。猪除けが目的であつた事は言ふ迄もない。段々埋められて、今に殘つてゐるのは極く稀であつた。たゞホリンボーなどゝ呼んだが、或は別の名稱があつたかと思ふ。其外側には、高い垣根が築いてあつた。多く石で積上げたもので、猪除けの垣根と言ふが、或は又ワチとも謂うた。然し一般にワチと呼んでゐたのは、燒畑に繞らした垣の謂であつた。二本宛杭を打つて、それを骨組として、横木を互ひちがひに組んで行つたものである。又燒畑でなく共、山村の畑には、多くワチが繞らしてあつた。この方は燒畑とは異つて、頑丈な杭

を隙間なく打つた半永久的な柵で、材料は栗の木を割つた角であつた。破れた處から杭を補つてゆくので、處々色が變つてゐたりした。多くは山のサガ畑で、街道などから望むと、遙かな山の半面に、年を經て眞白に洒らされたワチの中に、青い麥のウネが段々に續いてゐたりして、一種なつかしい物であつた。

五　猪の案山子

猪のソメ(案山子)の事は、既に三州横山話にも書いた如く、一ッ一ッ觀察すると、隨分變つたものがあつた。氏神の祭禮に曳出した一丈もある藁人形を、後に着物だけ剝いで山田へ持込んで立てたのがあつた。たしか日露戰爭の凱旋の年で人形はロシヤ兵だつたと思ふ。顏を胡粉で彩色した念入の物だつただけに、遠くから眺めても氣味が悪いなどゝ言うた。又北設樂郡の田峯で實見した物は、藁で馬を慥へて人形を乘せたのがあつた。鳥嚇しの案山子などもさうであつたが、以前のやうに簑笠姿の物などは殆ど見なくなつて、メリヤスのシャツを着せたり、經木細工の帽子を被らせたりした。さうかと思ふと或家では、昔からある袴のボロ〳〵に成つたのを、こんな物は用は無いと言うて、案山子に着せてしまつたと謂ふ。

猪の案山子

同

現に自分等が聞いた唄の中に

女郎買ひして家の嗅見れば三里やまをく猪のそめ

とか、或は下の句だけ、布里や一色の猪のそめなどゝ言ふのがあつた。何れにしても唄の作者などには、思ひも及ばぬ恰好であつた。

猪上げのカベ

女の髪の毛を燒いて串に挾んで立てたり、カンテラを棒の先に吊して置いたのと、同趣向の物で、古くからあつた物に、カベと謂ふ物があつた。ボロを心にして、上を藁で包んだ、長い苞のやうな格好だつた。一方の端に火を附けて、竹竿の先に吊して畔毎に立てゝ置いた。それの極く小さい

物を、夏分ブヨを除ける爲めに、草刈女などが腰に下げた位だから、ボロのキナ臭い煙で、猪を厭やがらせる爲であつた。或は又太いホダの端に充分火を廻らせて、畔に轉がしたのがあつた。二ツ共少し位の雨にも平氣で、二日三日位續けて燃えてゐたのである。

案山子では無いが、猪除けのワチの變形と思はれる物に、山續きの畔から畔へ鐵條網を張廻した物があつた。新趣向の一ツで、間接には戰爭などの影響であつた。然し結局昔通りの番小屋に、刈入れ迄番をするのが、確實でもあり、割合手輕でもあつた。それで吾も吾もと新に小屋を設けて、果は一目に見通される程の窪中に、思ひ思ひの藁小屋が、五ツ六ツも建つた事もあつた。只昔と違つて來た事は、鳴子の綱を引く代りに、石油の空罐を叩き、マセ木を打つ代用に、屋根葺用の亞鉛板を持込んで叩いたりする事だつた。さうかと言うて老人のある家では、昔ながらのマセ木を打つて居たのもあつた。

マセ木は小屋を中央から仕切て、横に渡した丸太であつた。爐にあたりながら、手頃の棒を持つて、時折タン〳〵と叩いては、眠い〳〵夜を送つたのである。そして合間々々に、ホー〳〵と呼ばつたのである。尻取文句の中に、ホイは山家の猪追ひさと言ふのがあつたが、正にそれであつた。マセの代りに、板を打つのもあつたが、何れにしても寂とした秋の夜の山谷に、その音が谺する時は、猪を嚇すに充分だつたのである。思へば猪追ふ術も昔が尙なつかしかつた。況して吾打つマセ木の音に聞惚れたなどの心持は、懷かしい限であつた。

自分が親しくした老人に、八十幾つ迄番小屋泊りをやつた男があつた。息子達が近所の思惑を案じて、何度やめてくれと賴んでも諾かなんだ。遂々死ぬ年迄マセ木を叩き通したと言ふ。實は猪番が何より樂しみだつたさうである。その老人の手すさびに打つマセ木の音が、未だどこか耳の底に響くやうな氣がする。

六　村の變遷と猪

誰しもさう言うた事であるが、近頃の猪は以前のワチオトシアナ時代から較べると、悧巧になつたばかりでなく、性質も惡くなつたと言ふ。惡くなつたと言ふのは、畢竟性質が單純でなく成つた事である。僅かな物の響にも、變つた物の香にも、怖れて近づかなかつた筈の猪が、忽ちそれ等に慣れて平氣になる事であつた。さうかと思ふと次第に出沒が巧妙になつて、一夜の間に十里十五里の山の奥國から、峯傳ひ窪傳ひに風のやうに渡つて來て、その夜の中に再び元の棲家へ還つてしまふと信じられた。猪が出たと聞いて、附近の山を搜したのでは、もう遲いとは、現に狩人が言うてゐた。

軒端に積んた稻束を襲ひ、屋敷廻りの甘藷穴を掘返すなどは、五十年前を考へれば何の珍らしい事でも無かつたが、當時と比べると、猪の本據であつた筈の山

がひどく明るくなつた後だつたゞけに、猪が猪るくなつたやうに考へられたのである。今一ツの理由は、一頃盛に木が伐られた時に、殆ど跡を絶つた事實もあつたので、その後出る猪は、別物のやうにも考へられたのである。

山の姿が以前と較べてひどく變つた事は、自分などの記憶から判斷しても、著しいものがあつた。屋敷の裏手の杉木立へ入れば、一丈もある齒朶の茂みが續いて、筧の徑に覆さつた奇怪な恰好の杉の古木には、(これをヂャンカと呼んでゐた)毎年木鼠が巣喰つたのでも想像される。前の畑のクロには、夕方になると畑中を影にするやうな榎の大木があつた。屋敷内にあつた榧の大木の根元は、近づく事も出來ない程、蔓草類が絡み合つてゐた。表の端に迄枝がカブさりかゝつた處は、その木一ツでも、充分山村の風趣があつた。これ等は自分の家だけについてゞあるが、村全體を見渡しても、山を分けて家が在つた感があつたのである。

猪が好んで出た山田の畔續きの草場(くさんば)柴山には、きまつて合歡木が遺してあつて、それが相當古木になつてゐた。夏分など濃い綠の草生の中から、白い木肌が立並んで、あの紅色の美しい花の咲く時などは、山の美しさ以上、果しない山の奥深さがあつた。草場へ合歡木を立てる事は、草の爲めに宜いと言傳へてゐたのであつたが、今ではそんな事を信じる者は無かつた。何でも日蔭が惡いとして、片端から伐つてしまつた。齒朶の茂みは下苅の度に淺くなり、萱場ボローは切開いて、猪の立寄る影は殆ど無かつた筈である。況して昔は同じやうに出沒した鹿や山犬は、とくに姿を匿してしまつて、夜でも汽車の笛を聞くやうな處へ、出て來る猪の氣が知れなかつたのである。

猪除けの案山子にしても、追ふ方法でも、雜然とした如何にも心無い遣方であつたが、實はもう居なくなる筈だに、未だか未だかで、一日延しに日を送つてゐたせいもあつた。

別に說を爲す者は、深山の御料林等が伐採される度に、其處を追はれた猪が、

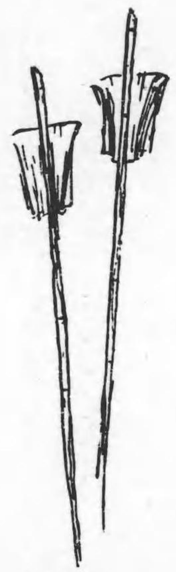
迷ひ出るとも謂うた。或はその邊の消息は事實であつたかも知れぬ。現に鳳來寺御料林が拂下げになつた年には、夥しい猪が出たさうである。

七　猪除けのお守

或る雨のそぼ降る晩だつたと言うた。猪の番小屋のすぐ傍で、何やらボソリと變な音を聞いてふしぎに思つた男が、ソッと垂莚の中から覗くと、畔に沿つた井溝の傍に、何だか眞黑い物が眠としてゐる。初めは狩人でもあるかと思つたが、よく〳〵透して見ると、それが大きな猪だつたと言ふ。

如何に番をしてゐても、ちよつと油斷をすれば、猪が出たのである。或家では人手が無い爲に、夜通しカンテラを田の中に點して置いてそれでも喰はれたが、その隣りの田では、作主が忙しいまゝに、どうでもなれと覺悟を決めて、幾日もほつて置いたが、一向寄付もせなんだと謂ふ。或は不運の者に限つて荒されるなどゝ信じられた。さうかと思ふと、たゞの一晩、風邪氣で番小屋行きを休んだばつかりに、ひどく稻を喰はれたりした。かうなると、屋敷に居る鼠かなぞのやうに、そつと其處いらから此方の內證話を聞いてゐるやうにも思へたのである。あの人も運が惡いのんなどゝ、猪に出られた作主を女同志が陰で囁いて居るのを、現に耳にしたものであつた。

早昔話になつた山住（やまずみ）さんの猪除けの御守りを、一人が思ひ出して迎へて來ると初めは嘲つて見ても、何だか不安になつて、吾も吾もと迎へに行つて、畔毎に立てた。山住さんは山犬を祀ると謂ふ



猪よけのお守札を立てたる處

猪除けのお守

神であつた。つい三四年前の事で、刈取を終つた後迄も、畔から畔へ、矢串に挿した白い紙札が、夥しく立つてゐた。中には迎へに行つた時、果して猪が出ぬかなどゝ駄目を押して、お札で心許無くばお姿をお伴れ申すかと、取次の男に嚇されて、いやそれには及びませぬと、早々還つたなどの話もあつた。然し奇妙に其年一年だけは、猪が出なんださうである。さうは言つても、翌年は一人も迎へに行つた者は無かつたと言ふから、村の人々の心持も、猪以上判らなんだ。

山住さんのお姿を借りて來れば、猪でも鹿でも田へ近づく物は片端から喰殺して、其場へ轉がしてあると謂ふ。又その期間中は、田圃近くの草の葉蔭や石の上に、見えるともなく凄いお姿が顯はれるとも謂うた。現に村の空寺へ住持になつて來た山住一派の坊さんは、疑ふなら、喰殺してお目にかけやうかと、恐ろしい事を言うたさうである。

自分も一度その坊さんを訪ねて見たが、生憎不在で會へなんだ。留守の婆さんにいろいろ訊いて還つたが、須彌壇の本尊と並んで、榊を立て注繩を張り、白い幕が下つて山住さんが祀つてあつた。中に方五寸許りの眞黑い箱があつて、お姿が納まつてゐると謂うた。たしか箱の表に右の字が一字記してあつた。中が拜見したいと圖々しく頼んで見たら、雜作は無いが後で納めるのが六かしいから、何なら住持の居る節にしてくれと、尤もらしい言譯であつた。箱から出すと一緒に荒ばれて困るのださうである。さう言ふ間にも、婆さんの陰慘な顏付と右の字を書いた箱の神祕に魅せられるやうに思つたが、後で聞いた話では、村でも心ある者は、住持の遣方に困つてゐるとの事だつた。一方坊さんには、山住さんがどうしても離れぬのださうである。その後寺の後の山へ、新しく祠を立てゝ祠つたと聞いたが、手近に山住の一派が來られても、猪は未だ盛に出るので、番小屋泊りも休まれぬさうである。

八　空想の猪

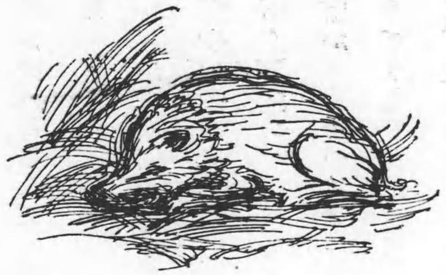
昔て或る若い女房が、朝未だ仄暗い内に、村のアイチの入の山へ、苅干の草を背負ひに行くと、路の行手へ灰色した小豚程の獣が現はれて、前に立つてコロコロ歩いて行つたと言ふ。其時獣の方では、後から人間の來る事などは、一向感付かぬらしかつた。女房も氣丈者で、平氣で後を隨いて、ものゝ三丁も行つたが、その内獣は脇の草叢へ外れてしまつた。家へ歸つて其話をすると、老人からそれこそ猪だと聞かされたが、實はビックリするかと思ひの外、アンナ物が猪だつたかと、案外な顔付をしたさうである。

話に聞いた許りでなく、現に田圃の稻を踏にぢつたり、ノタを打ち、蚯蚓を掘つた跡を見て、實際の姿を想像して居た者が、一度び自然その儘を見た場合には、此女房と同じ物足りなさを感じたのである。誠にアンナ物が猪だつたのである。

自分等の經驗でも、猪は恐ろしい物、强い獣と、物心つく時から聽いてゐた。それが或時屋敷の奥の窪から、狩人に昇がれてゆく姿を、初めて見た時は、同じ幻滅を感じたものであつた。それで又一方には、丸で別の猪の世界を想像してゐたのだから不思議である。どうしても實感の方が壓へられ勝であつた。

幼少の頃八名郡宇里の山里から來た杣が、家に泊つてゐた事がある。五十五六の極く實直らしい、話好きの男だつた。妙な事にその男の話が、いつも狩や獣の事ばかりであつた。日數が經つて初めて判つたのだが、前身が狩人だつたのである。どうしてヨキ(斧)を持つやうに成つたか聞きもせなんだが、凡そ一ヶ月程の間に、數限りなく狩の話や獣の話をしてくれた。その内今だに忘れられぬ程の感動を與へられたのは、猪と鹿の比較談であつた。山のタワなど遁げてゆく鹿を狙つて撃つた時、旨く急所に當ると、文字通り屏風を倒す如く轉がつて、何とも言はれぬ快哉であるが、猪の方だとさうは參らなかつた。如何に急所を撃たれても、

決して、鹿のやうな倒れ方はせなんだ。彈丸を受けてからも尙二三歩肢を運んで、靜かに前屈みにツクバイ込むと言ふのである。その話を聽いて居ると、如何にも剛勇の士の最後を見るやうで、猪の猪らしい態度が、名實共に適つた如く感じられたものである。



或は又恐ろしい手負猪の話であつた。これに掛つたが最後命は無いと聽かされて、牙を剝いた物凄い姿を胸に描いて見た。その恐ろしい手負猪を、傍へ引寄せてから旨く引外して、後の谷へまつさか樣に突こかしたと云ふ村の某の逸話を、何時迄も信じてゐて、幾度か人にも話したものであつた。

さうかと思ふと劇しい追狩の最中に、遁げながらも幾度か引返して獵犬を追捲るといふ話を、恍惚として聽入つたものである。幾度聞いても厭かぬ興味を覺えたが、その度に空想の世界が、段々根を張つて伸びてしまつたのである。

九　猪の跡

狩人の話では、猪は夏から秋の初にかけて、カリに着くと謂ふ。カリは峯近い萱場（かやんば）ボローなどの、稍平坦な地を撰んで、猪が作つた寢床であつた。地面を長方形に穿つて、その中にはゴ（落葉）や枯草を敷き、上には稍丈の長い萱の類を橋渡しに覆つてあつた。出入りは一方の端からするとも謂うた。カリは又山の中腹にもあつたが、窪中などの濕地は避けたのである。虻や蚊の襲來を防ぐ爲と謂うたが、子も又其處で育てたので、生れて間もない子猪が、カリの近くに斃れて居る

事があるといふ。未だ肌に毛を生じない時、蚊に刺殺されるのだと謂ふ。

萱場は文字通り萱立場で、六尺以上にも伸びた萱が密生して、足を踏入れる事も出來ぬやうな處が、自分の村などにも未だあつた。栃の類が疎らに立つて居る位で、殆ど他の植物は生える餘地がなかつた。間々虎杖が混つて居た位のものである。ボローは山にはよくある人間の手の未だ及ばぬ一廓で、茱萸、あけび、山葡萄、其他名も判らぬ蔓科の植物が、互ひに絡み合つて、鬱然と塚のやうになつて居た。日光も中へは碌々通さぬ程であつた。秋になるとそれ等の實が一時に色づいて、鳥の群なども集つた。自然の惠の豐かな處で、狸などの穴も、さうしたボローの中が多かつた。どちらも屈竟な猪の潜れ場所であつた。

ノタ(ぬた)を打つた跡にも、狩人は又注意を怠らなかつた。猪がノタを打つのは窪合などの踏んでも直ぐ水の湧く濕地で、グシャッタレと呼んだ程、水の多いジメ〳〵した處であつた。地形から言ふと澤谷の奥の行詰りであつた。或時村のネブッブの山で跡を見た事がある。子供の時で、判然記憶せぬが、何でも一ヶ所ひどくこね返して、田植の植代を掻いたやうになつて、上に澄んだ水が溜つて居たと思ふ。その折聽いた話だつたが、猪は體が熱つて熱つて仕方がないので、時折來ては體を漬けると謂ふ。

山の窪中には、猪がノタを打ちかけた跡と言ふのがあつた。兩方から谷が迫つた中の、緩かに徑を通じた處などで、一寸進む事も出來ぬ程に踏荒して、肢跡の一ッ一ッに水が溢れて居た。まだ昨夜出たばかりだに、其處いらに猪が居るなどと言うた。肢跡は、蹄の先が尖つた物程若猪で、圓みが深い程古猪と謂ふ。

或は又山のツルネなどの、平坦な草刈場を畑のやうに掘返した跡があつた。蚯蚓や地蟲を搜したのであるが、シャベルでゞもやつたやうに、一塊りづゝ土が穿つてあつた。さうかと思ふと、木の根を掘り石を分けて、自然薯を掘つた。折角秋に目標の麥を播いて置いたに、猪の奴に先を越されたなどと、自然薯掘りが口

惜しがつて居た。山の栗などもさうであつた、猪の荒した後には、殆ど一つとして殘つては居なかつた。悉く落葉を分けて搜し出してしまふ。時偶あつたと思へば、中の實だけが旨くゑぐり取つてあつた。

昔は床下のゴツトウ（地蟲の類にて多くは蟬の幼蟲）まで掘りに來たと言ふ。朝起きて見たら背戸口にえらい穴が明けてあつたなどと言ふた。山澤に出て蟹をあさり、又蛇も食つたと言ふから、何でもござれ食はぬ物なしの猪だつたのである。

十　猪に遇つた話

猪が人の近づいたのも知らずに、大鼾で寢てゐた話は、よく耳にする事である。七八年前、アケビを採りに行つて、猪に遇つたと言ふ女から、當時の狀況を聽いた事があつた。山國とは言つても、狩人以外で、猪を目のあたり見た者は、至つて尠なかつたのである。村のヂベツトーの山は、深い窪で底に澤が一筋流れてゐた。その澤を跨いで茂つたボローの一ッに、アケビが鈴生りに下つて居たさうである。女は萱を押分けて近づいて、今一息で其下へ出られると思つて、ヒョイと前を見ると、萱の葉がおそろしく寢たまん中に、眞黑い獸が寢て居た。ハッと思つた時ゴロ〳〵と猫のやうな鼾が聞こえたさうである。どんな恰好で、どんな風に寢て居たかも、一切夢中で遁げて來たと言うた。アケビの方へ目を奪られて、傍へ行く迄氣がつかなんだゞけに、驚き方も劇しかつたのである。それにしても、紫色に熟れたアケビと、枯萱の中に眠る猪の對照は、思ひがけぬ繪であつた。その上アケビの枝にいろ〳〵の鳥の群を配したなら、一段美しい畫面が展けたらうと思ふ。

槍にはならなんだが、次の話も數尺の距離から猪を觀察した、耳新しい實驗談である。

村の某の男であつた。鳳來寺村分垂（どんだれ）の山中で、一人炭を燒いて居ると、午過ぎ頃とも思ふ時分、何やら近くの齒朶を押分けて山を降つて來る物があつた。木間からソッと透して見ると、今しも一頭の巨猪が、靜かに炭竈の方へ近づきつゝあつたと言ふ。突差の事で、遁げる間も隱れる隙も無い、飛掛つたらそれ迄力の限り撲たうと肚を据ゑて、炭木をかたく握つて居たさうである。然し猪は男を見ても格別驚いた樣子もなく、靜かに炭竈の傍を通り拔けて、下へ向けて降つて行つたと言ふ。事實は只之だけであつたが、某の說明に據るとその猪が劫を經た恐ろしい古猪だつた。毛並は灰ぼ色が殆ど白くなつて、脊から胸へかけて、松脂でも塗つて居るらしく、觸つては見なんだが、カチ〳〵と丸で岩を被つたやうであつたと言ふ。何だか講談に出て來る狒々のやうで、遽に信じ難い氣もされるが、實驗者はかたく信じて疑はなんだ。猪が松脂を塗る話は他にもある。而も此話には、その猪を只物でなくするに充分な傍證も絡んで居た。數日前から其方此方の山で、幾組もの狩人を惱まして、彈丸（たま）も三ッ四ッ喰つて居ながら、どうしても捕る事の出來ぬ出沒自在の古猪があつた。多くの點がそれに符合して居たのである。

その後その猪は如何にしたか消息は遂に聞かなんだが、恐らく擊たれたにしても、只の殺され方はしなかつたであらう。一方話の方は、實驗者が平素無口な實直者だつたゞけ、そのまゝ信じられて、次第に松脂のやうな箔を附けて、永く語り傳へられるであらう。

山深い土地に住んで、猪とは絕えず交涉を有つた人達でも、冷靜な態度で觀察して居た者は至つて尠なかつた。自然のまゝの存在には、昇がれて行く骸などとは異つて、威嚴と言ふのか兎に角犯し難い或物を備へて居たことは事實である。その爲めか多くは見た目以上に、語らうとした點もあつたらうと思ふ。狩人の多

くが已にさうであつた。

十一　猪狩の笑話

現に自分の知つてゐる一人だが、初めて猪狩の勢子になつた時、猪が恐ろしくて大縮尻をやつた話を、何遍となく語つた男がある。話の筋はかうであつた。狩場に着いて只一人になると、猪が吾が方へばかり來るやうに思へて、心配でならなんだ。軈ての事隣の窪でドンと一發筒音が響いて、ホーッと矢聲がした。それを聞くと急に恐ろしくなつて、夢中で傍の栗の木へ駈け上つて、來るか來るかと下ばかり覗いて居た。猪を撃つなどの氣持はとくに何處かへ飛んでしまつた。すると又もや近くで一發筒音がしたが、それと同時にすぐ後ろのボロから、ドサドサとえらい地響を立てゝ何やら躍り出した者がある。それに驚いてビックリ飛上つた拍子に足を踏外して、根元へしたゝか突ッこけた、恰度其處へ一方を追はれた猪が落延びて來て、男を尻目に掛けて、悠々ツルネへ向けて走り去つた。初め地響を立てゝ躍出したのは、實は其處に眠つてゐた子猪達が、筒音に驚いて遁げ出した處だつた。お蔭で腰骨を撲つた上、仲間には笑はれたり怒られたりして、猪追ひにはもう懲々したと言ふのである。

自慢話などゝ異つて、當の本人の失敗談だけに、聽く者の興味は深かつたが、實は同じ類の話を、他でも聞いた事があつた。或は臆病者の猪狩に、附いて廻つた笑話の一つであつたかも知れぬ。自分が初めて聽いた時の記憶では、未だ年が行かなかつた爲か、充分可笑味がのみこめなくて、反つて傍に居た大供達がゲラゲラ笑つて居たものである。

男の名は鈴木戸作と言うて、本業は木挽だつた。元來話好きの男で、又話の材

料を不思議な程澤山持つて居た。自分の家で普請の時には、前後百日餘りも泊つて仕事をして居たが、その間、いくらでも新しい話があつた。此話なども、話の合間に、面白可笑しく聽かせた一ッであつた。

男も好し腕もよし、その上愛想がよくてどうした因果だろなどゝ、自身でも言うて居た程で、その頃もう四十五六であつたが、女房も持たず、近間の村から村を渡り歩いて居た。よく〳〵の呑氣者さなどゝ、陰で笑つて居た者もあつた。又戸作の嘘話かなどゝ、頭からけなしてしまふ者もあつた。仕事を頼み度いにも、何處に居るか判らぬなどゝ言うた程で、定まつた家も無かつた。其頃自分の家に古い三世相の本があつて、身の上を判斷してやると喜んで聞いて居た。數年前郷里へ歸つた時、何年振かで途中で遇つたら、叮嚀な挨拶をして、貴方がいつぞや五十六になれば身が固まると言うて下すつたが、お蔭で家を持ちましたと言はれて、面喰つた事があつた。

極く呑氣さうに見へたが、身の上を聞くとさうでもなかつた。何でも親がひどく年老つてから出來た子で、兄弟達から邪魔者にされ通して育つたと言うた。父親も他の兄弟達の手前家に置く譯に行かないで、七ッか八ッの時分に親類へ預けられた、そこで子守をさせられながら育つたと言ふ。俺のやうに苦勞をした者は無かつたと、案外な話を聞かされた事があつた。

餘計な話が長くなつたが、前言つたやうな滑稽は、何も戸作の嘘話ばかりではなかつた。實は多くの狩人に、共通の經驗であつたかと思ふ。或村の物持の主人が、猪狩に興味を持つて、一遍やつて見たくて堪らず、わざ〳〵眞白い鹿皮のタッヽケを慥へて、凜々しい狩裝束に身を固めて見ても、いざとなると猪が恐ろしくなつて尻込みして、遂只の一回も現場を踏まずに終つたなどの話は、對手が素人で物持の主人だつたゞけ、臆病さも一段と濃厚だつたのである。

十二　昔の狩人

猪の話に直接關係は無かつたが、狩人の話の次手に、珍らしくもない昔話を一ツ附加へる。

或時或處で一人者の狩人が、夜業に爐邊で翌日使ふ鐵砲丸を、茶釜の蓋でせつせと丸めて居た。すると向ひの爐緣に飼猫がチャンと座つて、眤と手附を見て居る。丸が一ツ出來上つて脇に置く度、前肢を上げて耳の後から前へ一回越させた。翌朝は早く起きて、狩に行かうとして爐の茶釜の下を焚きつけたが、不思議な事に前夜使つた筈の茶釜の蓋がどうしても見付からない。而も其朝に限つて飼猫の姿が見えなかつた。狩人はそのまゝ支度して未だ暗い内に家を出た。段々山へは入つて行くと、行手の岩の上にある松の大木から、何やら怪しい光がする。早速丸込めして一發狙つて放したが、一向手應へが無い。次から次へいくら撃つても手應へがなくて、たうとう有りつたけの丸を使つて、最後の一發を放してしまふと、其時初めて何やらチャリンと金物の落ちた音がした。怪しい光物は未だあるので、今度は別に取つて置の丸を取出して撃つと、初めて手應があつた。そこで岩の下へ行つて見ると、猫が頭を撃拔かれて斃れてゐた。よく〳〵見ると朝方見えなかつた飼猫であつた。而も傍には茶釜の蓋が轉がつて居た。猫が茶釜の蓋を持出したのである。そして前夜作つた丸だけは防いで、もう用はないと、蓋を捨てた處を一方狩人は別の丸で撃つたのである。別に黃金の丸で撃つた話もある。實は何でもない化猫の話であるが、只自分が此話に興味があるのは、話にもある通り、自分等の記憶にある頃にも、狩人の中には、茶釜の蓋で、鐵砲丸を慥へて居た者が未だあつた。型に流しこんだ鉛を短かく切つて、それを木の根株などで慥へた頑固な臺の上で、茶釜の蓋で壓へながら、ゴロ〳〵丸藥でも造るやうにやつて居た。遂ひ近所の家の主人が、それをよくやつて居た。元込の舊式な火繩銃

を持つて居た、先代からの狩人で、若い頃には背戸の山で猪を撃つた事もあつたと言うた。滅多に狩に出かけるやうな事は無かつたが、只鑑札だけは毎年受けて置くとも言うた。平素は農業熱心で、遊ぶ事が何より嫌ひだと言うた程の男であつた。それがどうかすると、ブラリと鐵砲を舁いで山へ出掛けたのである。さうして一日山を歩いて來れば氣が濟んださうである。

此男などのやつて居た服裝が、矢張昔の狩人そのまゝであつた。鹿皮のタツヽケを穿き、背に木綿のイヂコ袋を負つて、腰に昔風の山刀を帶んで居た。道がにもう藁の舟底などは被らなんだが、火縄は持つて居た。他の專門の狩人は服裝なども段々新しくなつて行つたが、年に一度か二度しか出ぬ爲めに、昔のまゝの物が、そつくり無事で居たのである。その爲めに、そんな大時代の風をして狩にも出たのである。實は狩とは言ひ條氣晴しに行つたのだから、道具など何でも構はなかつた點もある。

自分の家などにも、火縄銃が一挺あつて、別に粗末な鞘に納めた山刀も一振あつた。矢張祖父の代迄は、時として氣晴しに山へ行く事もあつたさうである。

十三　山の神と狩人

狩人が猪を撃つた時は、其場で頸のイカリ毛を拔いて山の神に捧げるのが、古くからの作法であつた。その方法は先づ手頃の木を切つて皮を剝ぎ、尖を割いて串を作り、それに毛を挿んで立てるのである。別に其場で臟腑を拔いて祀る事もあつたが、猪の場合は極く稀であつた。（詳しくは鹿の

項に讓る）その折の唱へ言などはもう無かつた。只實直な狩人には、人に物言ふ如くに、よう猪をお授け下されたと、唱へる者もあつたと言ふ。

山の神を祀る事は、狩の前にも行つた。幾日山を歩いても、更に獲物に遭遇せぬ時は、一旦家に還つて、更に出直したのである。而して山口に地を撰んで、手近の常緑木の小枝を二三折敷いて、其上に酒を灌ぎかけて祀つた。山の神樣猪をシナシて下されと祈つたと言ふが、猪狩に限つた事では無かつた。シナシて下されは狩人の言葉で、獲物に巡り合せ給への意であつた。或は又獲物を前にして祀る事もあつた。多くは巨大な古猪などの場合で、狩の懸念される折であつた。方法も前と變りなく、殘りの酒を汲交して出掛けたのである。

山の神は女性であるとは、專ら言うた事で、山の木の葉一枚も惜まれると謂うたが、或は一眼一本脚の大漢であるとも謂うた。現に鳳來寺山中で、遭遇した者もあつたと聞いたが、久しい前で、而も詳しい事は傳はらない。さうかと思ふと、

同じ山中で永年狩を渡世にして居た丸山某は、數里四方に亘ると言ふ森林中を殆ど至らぬ隈なく跋渉して、人跡稀な山中に夜を明した事も、幾度かはかり知れぬが、たゞの一度も遭遇せぬからは、昔の人の嘘だと斷言した。而も獲物を取匿される事だけはあつたと言ふ。何物の所爲か判らぬが、確かに斃したに拘らず、谷を渡つて近づいて見るともう影も形もなかつた。中には程經てから山犬などに荒されて居るのを、見出す事もある。さうかと思ふと幾度も搜索して、確かに無かつた筈の處に、早半分腐つて居るのを、後に發見する事もあつた。何れにしても目の迷ひなどゝ信じられぬ、山の不思議はたしかにあつた。それで結局は山の神に匿されたとして置いたと言うた。同じ山の西麓、玖老勢村の某の狩人は、斃した猪の行衞を索めあぐんで、諦めて還りかけると、誰やら後で呼んださうである。振返つて見ると、全身毛だらけの大男が立つて居た。最早遁げるに遁げられず其處に立竦んで居ると、大男は傍へ寄て何やら問ひかける。よく聽いて見ると、頻

りに何處の者だと尋ねるのださうである。さうして段々話す内、實は三十年前に家出した、同じ村の豆腐屋某の悴であると語つたと言ふ。その狩人には勿論其事は思ひ出せなんだと言ふ。どうして暮して居ると訊いて見ると、初めは木の實を拾つたり、木のアマ皮を剝いで飢を凌いだが、今では何でも捕つて食ふと言ふ。さうして居る内、何時か體中に毛が生へてしまつたと、語つたさうである。最後に別れる時、俺に遇つた事は、決して喋つて呉れるなと言うたが、其狩人が臨終の折に、傍の者に語つたと言ふ。其時見失なつた猪の行衞はどうだつたか、その男と關係あるやうに思はれるのに、其事に就いては聽かれなんだ。

自分に語つたのは、今年七十幾つになる老媼だつた。子供の頃母から聽いたさうであるが、恐ろしいと思つて、以來誰にも話さなんだと言うた。

十四　猪買と狩人

撃つた猪はその場で臓腑を抜く事も無いではなかつたが、一旦池や澤のほとりへ舁ぎ出したのである。今でもはつきり目に殘つて居るが、日の暮方にガヤ〳〵話聲を前觸にして、泥まみれになつた狩人達が、屋敷の奥の窪から出て來た事がある。中には體の前半分が泥になつて、ビッコを引いた者もあつた。その中に肢をしつかり棒に結へ着けられて、倒さに吊された猪が、二人の狩人に舁がれて行つた。その傍を犬が元氣よく走つて居た。一ッの赤犬は、横腹が破れて腸が少しはみ出して居た。そら猪が通るなどゝ言うて、吾勝に駈出して見たものである。

猪の臓腑を抜いて、猪買ひの來る迄水に浸けて置く場所をシヽフテと謂うた。村の籔下と言ふ家が、代々狩人で、谷底の日も碌々射さぬやうな屋敷であつた。表の端に太い柿の木が幾株もあつて、その下が澤になつてシヽフテがあつた。自

分が子供の頃は、もう名稱だけだつたが、二方石垣で圍んだチョッとした淵で、蒼く澄んだ水の底に、鰭の紅くなつたハヤが、幾つか泳いで居た。以前は日が暮れてから、松明を點して狩人がガヤ〳〵やつてゐた物だと言ふ。もう五十年も前であるが、多勢の狩人がいつものやうに臟腑を拔いて居ると、犬が向ふ岸に居て、頻りに鼻を鳴して居た。それを見た狩人の一人が、ホラと言うて、臟腑の一片を投げてやると、何時の間に來て居たのか傍の柿の枝に鷹が居て、アッといふ間にその一片を宙に攫つて行つた事があつた。

その頃は冬になると、何時行つても猪の二ッ三ッは浸けてあつた。或時村の某の狩人が、珍らしい巨猪を擊つて、臟腑拔き三十五貫もあるのを其處に浸けて置いた。それを新城の町から來た猪買ひが、えらい事をやつたのうと言ひながら、岸に踞んで、指頭で突ついて居たさうである。その内後肢を掴んだと思つたら、片手でズル〳〵と譯も無く提出したには、見て居た狩人達が何れも魂消たと言うた。金槌と言ふ力士上りの男で、江戸の本場所で三段目迄取上げた、力持で評判者であつたさうだ。

その頃は、捕つた猪は其まゝ賣つてしまつて、肉を食つたり、狩人が切賣するやうな事は無かつた。而して獲物のあつた晩は、日待をやつて、臟腑だけ煮て喰つたのである。食ふ時には、矢張諏訪明神から迎へて來た箸を使つた。前言うたシ、フテの傍の屋敷は、狩人達がよく集る場所だつた。其處で日待をやつて、臟腑を煮たのである。そんな譯かして、何彼と人出入が多くて、何時行つても、一人や二人は屹度遊んで居たと言ふ。

狩人が猪の臟腑を拔く時、第一に目ざしたのは、その膽であつた。シ、ノキと言うて、萬病に靈能あると謂うたのである。村でも物持と言はれる程の家では、必ず購つて貯へてあつた。狩人自身も持つて居た。糸で結へて陰乾しにして置いて、小刻みに刻んで賣つたのである。然し多くは肉と一緒に、猪買ひの手に購は

れて行つた。何處に需要があつたか知らぬが、時とすると肉全部よりも一個の膽の方が高く賣れたさうである。明治になつて後でも、膽が一ッ七十五錢で、肝心の猪の骸は二十五錢位にしかならぬ事もあつたと言ふ。

これは珍らしいと言はれるやうな大猪の膽であれば、物持へでも持込んで、米の三俵や五俵に代へるのは譯は無かつたと、狩人の一人は言うてゐた。今考へると、嘘のやうな話である。

十五　猪の膽

遂近頃の事である。水力發電所の用水路へ、開設初めの年に、猪が幾ッも陷ちた事があつた。朝になつて水門口に掛つて居るのを拾つた。その度に所員達が肉を取つて喰つたり人に遣つたりしてしまつた。中に一人土地から出た者が居た。勿論肉の分前も取つたが、そつと膽を取つて、これだけは一人占めにした。舍宅の縁側の庇に吊して置いて、子供が腹が痛むなどゝ言ふと、少しづゝ刻んで呑ませたと言ふ。その爲めその一軒だけは、他の連中が揃つて下痢をやつた際にも、醫者にも掛らずにしまつたさうである。或時所員の一人が其處へ遊びに來て、座敷に寢轉んで世間話をしてゐた。仰向いて居る內、庇に吊した黑い乾干びた物を發見した、これは全體何だと言うやうな事から、段々譯を話すと、ひどく口惜しがつたさうである。

萬病の靈藥と言ひ條、實際効驗のあつたのは、腹痛位であるとも謂うた。今から考へると、明治三十六七年頃は、猪の膽に對する一般の信望が、近在の醫者殿より遙かに上であつた。急病人の話などでも、第一に聞くのは、猪の膽を呑ましたかなどゝ言ふ、急ぎ込んだ言葉であつた。

或時茸の毒に中てられた男が、座敷中を轉がつて苦しんだ末、やう〳〵靜かになつたと思つたら、今度は堅く齒を喰締めて、はや應答も無いやうになつた。それを釘拔の柄で齒をこじ開けて、水に浮かせた蒼黑い塊を注ぎ込んでやると、忽ち正氣附いたと謂うた。或は又二日二晩苦しみ通した上、えらい熱で、どうやら危ないやうだと、急に夜中になつて身寄りへ飛脚を出した。それと恰度一足違ひに、猪の膽を持つて馳付けた者があつた。急いでそれを呑ませると、飛脚の者が村端れの峠へ、差掛つたかどうかと思ふ時分に、早おそろしい下痢が來て、其儘ケロリと樂になつたと謂ふ。この樣子では飛脚も入るまいと、慌てゝ飛脚を喚返す二度目の飛脚を出した。さうして夜の白々明には、その飛脚衆が揃つて笑ひながら還つて來たなどゝ謂うた。

山國のことで、猪の膽など如何程でも手に入りさうに思へるが、以前の村の生活では、在つても手に入れる事は容易でなかつた。況して平常から貯へて置くなどは、物持と唄はれる者かなんぞでない限り、叶はぬ事としてあつた。容易に手に入らぬだけ、それだけ靈能も高いとしたのである。

自分の知つて居る或女は、深夜に狩人の家を叩き起して、僅かばかり紙に拈つて渡されたのを、しつかり掌の內に握り締めて、山路二十町を一飛びに飛んで還つた事があつたさうだ。恰度五月田植の眞最中で、明日は植代を搔くといふその晩方に、遽かに亭主が腹を病み出した。さん〳〵呻き苦しむのを介抱しながら、いろ〳〵仕事の手順を考へて見た。明日植代が搔けぬとなると、後の順が狂つてしまふ、こりやどうしても、朝迄には快くせにやならぬと、覺悟を決めた。病人の少し靜まるのを待つて、隣村の狩人の家へ飛んで行つた。さうして猪の膽を手に入れて來て、病人の枕元に座つて、手鹽に浮かせた黑い小さな塊を、うや〳〵しく押戴いた時の心持は、忘れては勿體ない程、あり難かつたと言ふ。

然し後になつて、其代を拂ふには、他人に話されもせぬ程、えらい難儀をした

と言うた。僅か七十五錢の金だつたさうである。それを仕拂ふのに隣村の大海迄背負つて行つて、一把二錢何厘に賣つた薪の代を積んだ金で濟せた。他人の未だ寢て居る內に、荷慥へしては背負つたと言ふ。夏中かゝつてやつと纏めたが、男はよもやそんな事は知るまいと口惜しがつて居た。

十六　手負猪に追はれて

何というても猪の話では、猪狩の逸話が華やかであつた。舊幕時代から鳳來寺山三禰宜の一人で、山麓門谷の舊家であつた平澤利右衞門と言ふ男は、六十年も前に故人であつたが、今に噂に殘る狩好で兼て猪狩の名人であつた。體格も勝れて居て人柄も備はつて、若い頃は二十四孝の勝賴を見るやうであつたと謂ふから其武者振も想像された。而も剛膽此上もなかつたと言ふから、狩人には申分ない男であつた。いつも下男を供に伴れて狩に出掛けたさうである。そして少しも猪を怖れなんだ。如何な猛猪に遇つても必ず擊止めて、曾て後を見せた事は無かつた。これに反して伴の下男はお定りの腰拔男であつた。何時も狩の供と云ふと、又今日もかと言うては泣いたさうである。か程の剛膽者が生涯にたつた一度手負猪に追かけられて遁げた事があつた。而も田圃へ續く柴山を轉がるやうにして遁げたと言うた。門谷の高德の山で、巨猪を擊損じた時であつた。下男は逸早く逃げてしまつて無事だつたが、一方主は柴山から田の脇の路を走つて遁げた。それを猪は何處迄もと追かゝつて來た、はや背中へ掛りさうに迫つた時、折柄目の前に、馬頭觀音を祀つたシデの大木が立つて居た。それに身を交して、やつと根元を廻つて遁げた。さうして人と猪と、その根元をクル〳〵獨樂のやうに七廻り迄廻つたとは、隨分劇しい働であつた。その內どこでどう火繩の手捌をやつたか、

物の見事に後から一發、追がの巨猪を斃したと言ふ。後から一發はちと可怪しいが、實は劇しく廻る内、猪を追かけるやうな形勢になつたと言うのである。どうやら壯快の域を通り越して、話になつてしまつたのは惜しかつた。實はその劇しい働きを、下男が遠くから見物して居たのださうである。

家柄もよく身分も禰宜であつたが、生來の殺生好きで、夏分は毎晩のやうに、下男を伴れて川へ網打ちに行くのが仕事だつたと言ふ。吾村には網を入れる程廣い川が無かつた、それで山路一里半も越えて、寒峽川へ出かけたのである。或晩横山の寄木の瀨にかゝつた時、岩の間に川流れ(土左衞門)が引掛つて居るのを知らずに踏付けたが、格別驚いた樣子もなかつた。何だ川流れかと言ひながら、二度胴中を踏んで見て、更に川を降つて網を入れた剛膽さには、追がに下男も呆れはてたと謂ふ。

今に生殘つて居る老人達の話に據ると、年をとるに從つて、餘りに狩に對する

自信が強すぎて困つたと言ふ。他人が折角擊つた物迄、獲物を見れば何でも俺が擊つたなどゝ、頑張つて仕樣がなかつたさうである。時とすると筒音を聞いてからヨチ〳〵出かけて來て、俺が擊つて置いたが、よく運んでくれたなどと、とぼけるのか、さう思ひ込んで居るのか、無態な事を言出して弱つたと言ふ。對手が對手だけに、泣き出しさうになつた狩人もあつた。そしてもうその頃は、髯も髮も眞白い凄いやうな老人だつたさうである。

剛勇比類ない狩人のあつた一方には、又笑話の種になる程の弱い狩人の話もあつたのである。

鳳來寺村玖老勢の、遠山某と言ふ代官上りの男は、大達(おほだて)の山で手負猪に掛かつて、臀の肉をひどく喰はれて、半死半生になつて、それが因で遂に命迄縮めたと言うた。猪が人間を喰つた話は信じられぬから、畢竟嚙まれたとか、牙にかけられた類の話を誤り傳へた事とも思はれる。明治初年の事で、平素から餘り好感を

持たれない、代官上りの武士だつたゞけに、殊更興味深く笑話にされたのは氣の毒でもあつた。

十七　代々の猪擊

人品骨柄は或はどうだつたか知らないが、伊那街道と鳳來寺道の追分に、代々旅人宿を營んで居た某の家の主人なども、猪狩にかけては、平澤禰宜に勝るとも劣らぬ程の剛の者であつた。シデの大木を七廻りしたなどの、華やかな逸話こそ無かつたが、代々引續いた猪狩の名うてであつた。力は飽く迄強く、剛情一天張のがむしやらで、鐵砲は敢て上手と言ふ程でなかつたが、狩場へ行つても好んで難場に當つた。何でも人並以上の事を爲ないでは物足りぬ性分だつたと謂ふ。時折思ひ出して耕作の手傳ひなどをしても、力が餘つて、鍬を叩き毀す方が多かつたさうである。

先代は更に輪を掛けたがむしやらだつたさうである。冬の夜など屋敷近くで山犬が吠えたりすると、如何な深夜でもムックリ起きて、マセン棒を把つて、暗がりを追ひかけた程の無法者であつた。その血を享けた男だけに、物に畏れる等の心持は微塵も無かつたと謂ふ。手負猪を谷底へ突飛ばして、殺した話がある程だから、大抵は想像された。今でも當時を知つて居る者は悉くさう言うた。村の宮淵の橋普請の折、二丈幾尺の巨大な橋桁が崖に落ちかゝつて、危ない危ないと大混亂の最中、上から鳶口を一ッ打込んで、俺一人で押へて居るから全部下へ廻つて足場を組めと頑張つた。其時ばかりは馬鹿とも無法者とも言ひやうは無かつたと言ふ。然しながら近郷の狩人達が、手剛い猪に出遇つた度、酒を買つて山の神を祀る一方、必ず此男の許へ應援を頼みに行つたと言ふから、見掛倒しの剛勇で

はなかつたのである。

亡くなつたのは未だ昔でもない明治初年で、働き盛りの年だつたと言うた。山が生んだ最後の人とでも言ふやうな、特異な性格が煩ひして、晩年の家庭は實を言ふと悲惨であつた。ふとした氣紛れから、子供迄あつた女房を去らせてしまつた。そしてどこやらの町から馴染の女を身請して連れて來たが、それが又無類の惡女だつたさうである。毎日酒を煽つて寢て居る事と、子供を折檻する外には能がなかつた。而も後になつて、明日の命も知れぬ夫を、空屋同然になつた家に殘して、跡を昏ましたさうである。其時ばかりは道が剛情我慢な男も、口惜し涙を流して過ちを悔いたと言ふ。

二人の男の子があつて、何れも父の血を繼いで、臂力は恐ろしく強かつた。只幼い頃からひどい艱難の中に育つた所爲か、背は少しも伸びなんだ。兄の方は先祖の後を繼いで、以前の屋敷跡に、名ばかりの家を構へて居たのも悲しかつた。

弟は物心つく頃から、村の寺へ弟子に遣られたさうである。その間に何かの事から生みの親の居所を耳にして、僅か數へ年の十二だつたと言ふに、沙彌の着る衣一枚着たまゝ寺を脱け出して、何處をどう聞いて行つたか、三河から甲斐の歐澤へ、母を慕つて行つたさうである。それからえらい艱難に遇つた話も聞いた。

これが猪狩りの名うての家の末路と思ふと情けなかつた。今ではもう夢のやうな昔語りになつてしまつた。當年のいたいけな兄の方も、早頭に霜を戴く程になつた。さうして自分の知る限りでは、今に昔ながらの山刀を、持傳へて居る。

十八　不思議な狩人

山で狩などして居た者の中には、平地の人々が想像も及ばぬやうな、不思議な

官能や經驗を有つた人物があつた。遂近頃聞いた話などもその一ッである。實は不獵續きに弱り込んだ狩人達が、何處からか聞き出して頼みこんで來たのが最初で、評判になつたと言うた。未だ四十臺の體の小締りに締つたと言ふ外、格別見た處變つても居なかつた。只不思議な事は、山へは入つたと思ふと、猪の居る居ないがすぐ判つたさうである。

鼻で嗅ぎ出すのだらうとも言うたが、話の樣子ではそれ許りでも無いやうだ。それに就て、自分の知つて居る狩人の一人が言うた事があつた。猪の後を索めて齒朶を分けて行く時など、今の先き猪が通つたと言ふやうな事が、フッと胸に浮ぶが殆ど間違ひなかつたと言ふ。さうした官能の働か、所在を知る事は驚く程的確だつたさうである。而も山を跋渉する事の自由自在で、少しも倦む事を知らぬには、一緒に狩をした者が何れも舌を捲いたと言ふ。心持上半身を前屈みにした中腰の構へで、頭を前に出して小股に歩いて行く樣子が誠に尋常でなかつた。如何な茨の下ボローの中でも、忽ちくゞり拔けるには、とても眞似など出來なんだと言ふ。犬千代と渾名があると言ふから、千代何とかの名前らしいが、遇つた譯でないから詳しい事は判らない。北設樂郡カハテとかの者とだけは聞いた。獸のことや獵の方法など、何から何まで氣持のよい程知つて居たさうである。狩を濟ますと同時に、三日程居ただけで、何處かへ去つてしまつたと言ふ。お蔭で頼んだ狩人達は、思ひの外獲物があつた。何なら毎年頼み度いと言うたとも聞いた。餘り珍しいから、いろ〳〵噂を訊いて見た。

生家は村でも可成りな家柄ださうである。相當敎育もあつて、村長位は出來るなどゝ言うた。只持つて生れた病と言ふのか、狩をしたり、魚を捕る事が好きな爲めに、家にも居附かれないで、方々を渡り歩いて居ると云ふ。至つて仕事が嫌ひで、宿屋を泊り歩いて居ても、一間に閉ぢ籠つて朝から酒ばかり飲んで居た。宿錢が溜まつた時分に、釣の道具を持つて、フイと出て行つたと思ふと、晩方に

はビックリする程、鰻を捕つて來たさうである。それで拂を濟ますと、又暫くは遊んで居たと言ふ。魚に不自由な、山の中の宿屋などでは重寶がつた。只長く居つかぬので困ると言ふ。鰻など一日に三貫目も提げて來た事があつたさうだ。鯉なども、何處から提げて來るかと思ふ程、速く捕つて來たと言ふが、どうして捕るかなどゝ質問すると、フッと無口になつて、話さうとしなかつたさうである。鰻にしても鯉でも、餌で釣つて居た事は確かであつたと言ふ。何だか悉く信じられぬやうな點もある。

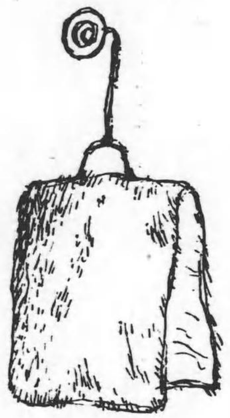
時とすると未だこんな人が居たのである。猪とは緣がないが、以前狂言の振付をして、村から村を廻つて居た相模屋某と名乘る男なども、變つた男だつた。地狂言が無くなつてからは、淨瑠璃を語つて、村々を廻つて居た。勿論それだけでは生活が出來なんだので、冬は小鳥を捕り夏分は鰻を釣つて渡世にして居た。鰻など捕る事は實に巧妙だつたと言ふ。今日は何百目欲しいと註文すると、晩方にはきつとそれだけの魚を提げて來たさうである。

一九　巨猪の話

巨猪を獲た話は、どんな狩人でも定つて一ッ位は有つて居た。それが申し合せたやうに四十貫と言うたのも偶然であつた。猪としては、四十貫ごころが或は限度であつたらしい。而もその程度の猪は珍しいとは言ひ條、未だ〳〵居たらしいのである。某の狩人がさう言うて居た。或時出澤(すざは)村の入りのアテで、仲間と二人で發見した肢跡は、曾て見ぬ程の巨大さで、こんな肢をした猪だつたら、牛程もあらうと想像して、山の神を祀るやら、應援を頼みに行くやら、えらい騷ぎをやつて、驕て擊ち止めて見たら、成程巨きいには違ひないが、四十貫そこ〳〵だつ

たと謂ふ。只肢の蹄が骸に似合はず巨きかつたさうである。そんな猪を萬一取逃したら、それこそ七十貫や八十貫の猪に忽ち成つたかも知れぬ。捕つた猪の方は、一々昇いだ代物だけに、馬鹿〳〵しい誇張は無かつたのである。

鳳來寺村行者越の、丸山某は五十幾年の狩人生活の間に、只一人で撃ちとつた猪の數は、七百頭に餘る程の剛の者だつたが、四十貫を超す程の獲物は、たゞの一ツしか無かつたと言ふ。然しながらその一ツが、六十貫に餘る巨大な物だつたと言ふから、先づ未聞の事として恥かしく無かつた。



猪の腰皮

もう四十年も前の事で、細かい點は深い記憶も無かつた、只何としても珍らしかつた事と、その猪を撃つ前日に、偶然遠くから望み見た印象だけは、今もありあり目に殘ると言うて居た。

恰度秋の末で、北設樂郡駒立の奥の山へ、遊牝(うかれ)猪を撃ちに入込んだ時だつたさうである。山の峯に立つて、遙かに前方の谷を望むと、枯草が何處迄も續いた中を、凡そ四五十頭もあるかと思はれる猪の大群が、一際勝れた巨猪を先頭にして、一齊に谷に向つて走りつゝあつた。その内先頭の猪が如何にも巨きくて、他の猪が子猪のやうに見えたさうである。餘りの見事さに遂見惚れてしまつた程で、その時程の壯觀は、後にも前にも見なかつたと言ふ。翌日あつけ無く撃止めた猪が實は前日群れ猪の先頭にあつた物らしく、比類ない巨猪だつた。一人で黑川の村迄背負ひ出して、美濃の岩村の猪買ひに賣つたが、臓腑拔き五十五貫あつたから六十幾貫は間違なかつたと言ふ。丸山某は異常な臂力の持主で、百貫の荷を負うて如何なる險阻にも堪へたと言ふ。

六十幾貫は、類ひ無い巨猪の筈であつたが、同じ男の語る處では、同じ北設樂郡古戸(ふつと)の山では、七十五貫或は九十貫の猪を撃つた事を、話には聞いたさうであ

る。然し實際見た譯ではないから、眞僞の程は判らないと言うて居た。

果してそんな巨猪が、居たかどうか何とも判らぬが、北設樂郡内でも、段戸山や彦坊の山の杉の植林地には、丈餘に伸びた萱の葉影に、多數の猪が群れ狂うて居るのを、山仕事に入込だ杣や木挽がよく見ると謂うた。御料林の事で、彼處ばかりは猪も放し飼だなどゝ、語るのを聞いた事があつた。果してさうであるか、聞かう聞かうと思ひながら、遂に其折もない。

巨猪ではないが、猪の一屬に、シラミ猪と言ふのがあつて、體に一面虱のたかつた物があるといふ。肉は臭くて喰べられぬと謂うた。果してそんな猪が居るか、これも未だ確める機會がない。

鹿

一　淵に逃げこんだ鹿

鹿を撃つた狩人はみなさう言うた。鹿は如何に驀地に遁げてゆく時でも、矢頃を測つて、ホーツと一聲矢聲を掛けると、フツと肢を緩るめて、聲の方を振返ると、そこの呼吸で引金を引いたさうである。矢聲はなる可く短く鋭切のよいのを上乗とした。ボボツと、投げつけるやうに掛ける程、効力があつたと言ふ。習性とすれば哀れにもいぢらしかつたが、狩人の狙ひ處にされたのは情けなかつた。

も一ツ、これも鹿に限つての事で、狩人には都合の好い事だつた。一旦手負ひ

淵に逃げこんだ鹿

になると、だん〴〵山を出て、里近い明るみへ姿を現はして來る事である。えらい深山なら知らぬ事、自分等が聞く話は悉くさうだつた。もう三十年も前になるが、舊正月二日の事ださうである。伊那街道筋の追分で、或家で朝早く起きて蔀を明けると、其處へ上の方からバタ〳〵と街道を駈けて來た物があつた。女房がハッと思つて見返した時はもう五六間先へ驅拔けて居たが、それが鹿で後肢を折て引摺つて居たさうである。直ぐ後から犬や狩人が追掛けて行つた、後には前夜降つたらしい薄霞がほんのり置いた街道に、紅い血の滴が長く續いて居たと言ふ。

その鹿はそこから二丁程下つた、村端れのめくら淵に飛込んで殺されたさうである。その淵は街道から覗くと、すぐ目の下に蒼く澄んで見えた。淵の主は巨きな牛だとも謂うて、晴れた日には日光の工合で、時折背中が見えると聞いた。めくら、かいくら、せとが淵などゝ言うた中の一ッで、界隈でも名高い傳說の淵だつた。龍宮へ續いて居るとも言うた。そして昔からよく鹿の追込まれる處だつたさうである。

その鹿は、間もなくもと來た道を昇がれて行つた。何でも朝未だ暗い內、鳳來寺道を五六町登つた處の、分垂のキノアテで肢を擊たれて、一氣に街道を走つて來たのださうである。その時の狩人の一人の話では、三歲の雄鹿だつたと言ふ。

子供の頃、村の入りの山から追出された鹿が、畑を橫ぎつて街道へ出て、フナト（船着場）へ續く坂を降つて、最後に飛込だ場所も矢張り淵だつた。宮淵と言うて、大海のお宮の森が向ふ岸に茂つて居た。高い岩に圍まれて、川幅五十間もある物凄い場所だつた。もう二十七八年も前で、その頃は、そこから川下の豐橋迄七里の間船が通つて居た。

手負鹿が、淵に飛込んだ話は他にも聞いた事がある。出澤の村のフジウの峯から追出した時には、鹿が岩の上を走つて下の鵜の頸の淵へ飛込んだと言うた。某の狩人が、八名郡舟著村小川の、シュッケッの峯で肢を擊つた鹿は、峯續きのカ

マヅルを、ソンデ(ツル嶺を後に反つた處)に行くと思はれたのが、前の斫り立つたやうなタワを轉がるやうに降つて、一氣に蕾楊川の淵に飛込んだと言うた。

手負鹿が最後に飛込んだのは、川沿ひの淵ばかりでは無かつた。山の中にある用水池を目がけた話もあつた。自分の家の近くにあつた、方が窪の小さな池にも追込んだ事があつたと言うた。大海の村の奥の二ッ池は、山の窪に同じやうな池が二ッ並んで、遠くからもその蒼い水が望まれた。矢張りその池へも追込んで殺した事があつたと聞いた。

よく耳にした事だつたが、鹿は手負になると、きまつて池や川へは入ると言うた。密林から里近い疎木立へ出て、畑や街道を走つたのは未だしも、あの蒼く澄んだ池や淵を目がけたのは、單に偶然ばかりでは無いやうに思ふ。

一　鹿の跡を尋ねて

猪と異つて鹿の方は、界隈ではもう何處の山にも居なくなつた。數年前迄は、鳳來寺山にたつた一ッ居たと聞いたが、それも捕つてしまつて、よく〳〵居なくなつたと、狩人も言うて居た。

その鹿がこゝ三四十年前迄は、今から思ふと嘘のやうに居たのである。狩人に追はれて、人家の軒や畑を走る姿を見る事は珍しくなかつた。未だほんの子供の時分であつた。軒端に莚を敷いて、ボトウ(日向ぼつこ)をして居る處へ、狩人に追はれた鹿が、前の畑から屋敷へ上る坂路を駈けて來て、座つて居た莚の端を蹴散らして、背戸の山へ駈け拔けた事があつた。その時傍に祖母が座つて居た。アッと言うて、自分を抱へる暇さへ無かつたと、後で笑つた事を覺えて居る。

家の縁側から見ると、南の方遙かに舟著の連山が立塞がつて、雨上りの後など

横山に て

は紫色に澄んだ山の腰に、白く水の落ちるのが見えた。彼處が舟著の百俵窪で、一窪で米が百俵取れるげななどゝ言うた。その手前の、僅かばかりの盆地に、大海有海の、二ッの部落が展けて居た。西に低い山を負つて、晴れた日には人家の瓦屋根から陽炎が上るのが見えた。

鐵道が通じて、大海の村へ長篠驛が出來てからもう三十年そこ〳〵になる。それより數年前迄は驛から數町離れた墓場續きの原に、未だ鹿の居た話がある。うつかりは入つた狩人の目の前へ、三又の角を揃へた雄鹿ばかりが四ッ、駈けて來た時は、うつかりして居ただけに遂ひ泡食つて、遁してしまつたと言うた。

大海の南隣、有海の篠原は、今でこそ見渡す限り桑園になつて、長篠戰記に勇名を遺した鳥居勝商が憤死の跡なども、その中に埋もれてしまつた程であるが、以前は西隣の川路の原と共に、又とない鹿の狩場であつた。どんな不獵の時でも、そこへ行けば必ず一ッ二ッは獲物があつたと言うた。山は何れを見ても低い赤禿山の續きで、何處に鹿が居たと思ふやうであるが、又一方の話では、そこの大窪の谷で、山犬が子を産んだ事があつたと言うた。而もその折赤飯を焚いて、近所の女房達と一緒に見舞に行つたと言ふ女が、九十幾つではあつたが、未だ達者で居た事を考へると、村の姿は吾々が想像も及ばぬ程、早く變化したのである。

有海から東へ川を渡ると、舟著山の麓で、麓に沿うて展けた部落を七村と言うた。大平、栗衣、市川、日吉、吉川、久間、乘本と、何れも小さな部落で、山と山との間に散らかつて居た。界隈の村から、何時も惡口の的にされた程の僻村だ

つただけに、鹿は至る處出た。中にも最も山奥の、大平（おほびら）、栗衣（くりぎの）では、狩人が鐵砲
舁いで通る度に、村の衆が出て來て、お狩人様どうか鹿の奴を撃つて下されと、
頼むげななどゝ言うた。勿論惡口ではあつたが、頼まれたのも事實だつた。狩人
が鹿一ッ捕つて、お頼う申しますと舁ぎ込んで行けば、酒一升を出すのが普通で
あつたと言うた。何れもひどい山田を耕して居たが、畑の尠ない米處で、而も植
付けたばかりの稻を、鹿が出る度片つ端から拔取つて喰つてしまつたのだから、
或はこんな不文の慣習があつたかも知れぬ。

三　引鹿の群

前に言うた追分は、二十年前迄は鹿の鳴音が聞かれた。もうその頃は、何處に
も聞かれなくなつて後であつた。街道筋でこそあつたが、どちらを向いても山の
陰で家數も五六しか無かつた。前を寒峽川が流れて、流れに臨んで山が押被さる
やうに聳えて居た。秋の日の暮々には、その山の峯で盛に鳴いたのである。闇を
透してキョーと鋭く響いた時は、馴れぬ客などは、飛上る程びつくりしたさうで
ある。曾て段戸山の山小屋に居た杣が、附近で鳴いた鹿の聲を、山犬が吠えたと感違ひして、一晩慄へ通した話があつた。最もそれは鹿が遊牝の時に限つて、稀れに唸るやうな聲をあげる、それで

追分の向ひの山

引鹿の群

あつたと言ふから、無理もない話であつた。鹿の聲は普通に鳴くのでも、相當の距離を置かないと、カンヨーと、妙な音には聞えなんださうである。

今でこそ追分の向ひの山は、杉檜が植林されて、雜木なども從つて伸び放題であるが、以前は見渡す限りの山が、悉く近鄕の草刈場で、峯に處々形の面白い松があつた外、木と言うては殆ど無かつた。冬の夜はそこで盛に山犬が吠えたものと言ふ。

入梅が明けて山の色が一段と濃くなつた頃には、朝早く其處を幾組かの引鹿(ひきしか)が通つたさうである。引鹿とは、夜の間麓近く出て餌を漁つたのが、夜明と共に山奥へ引揚げるそれを謂うたのである。恰もその頃は鹿が毛替りして、赤毛の美しい盛りであつた。それが朝露の置いた綠の草生を行つたゞけに、殊に目を惹いたのである。五ッ六ッ或は十五六も一列になつて、山の彼方此方を引いて行つた光景は、例へやうもない見事だつたと言うた。中には子鹿を連れて居るのもあつた。

其等の歩き振りを見て居ると、丸でビッコ(子馬)を曳くやうだつたさうである。或時など、全體どれだけ居るかと言うて、目に入るだけを數へ立てると、四十幾ッ居たと言うた。毎朝の事だつたが、門に立つて全部が引揚げる迄、眺め暮したもので、中には朝日が赤く峯に映つてから、悠々引いて行くものもあつた。それが未だ昨日の事のやうだと、老人の一人は語つて居た。

寒中風のヒュー〳〵吹捲る日に、峯から三ッの獵犬に追はれて、崩れるやうにタワを降つて來て、川の中へ飛込んで、犬と鹿と四ッが眞黑になつて、互に縺れ合つて居るのに、後を追つて來た狩人達も、鐵砲を向けたまゝ放す事が出來なくて、ぼんやり立つて居た事もあつた。さうかと思ふと、未だ日のある内に、山犬に追はれて岩の上を走る鹿を、畑に耕作しながら、見た事もあつたと言ふ。

もう五十年も前になるが、中根某が或日前の寒峽川の河原から、山犬が喰剩して砂原に埋めて置いた鹿を拾つて來た。近所隣へも振舞つて、自分も煮て喰つた

處が、その晩遅くなつてから、門口へ山犬が來て、恐ろしく吠立てたさうである。某はそれに驚いて、家の中から散々佗びたさうであるが、その聲が軒を隔てた隣家迄聞えたと言ふ。翌朝起きる早々に鹽を桝に入れて、昨夜(ゆんべ)は辛い目に遇つたと言ひ言ひ、前の河原へ置きに行つたと言うた。山犬の獲物を取つて來る時は、引換に鹽を置くものとは、一般に言はれて居た事である。

その家は、街道筋の牛方相手の宿だつた。今でも牛宿と呼んで殘つて居る。

四　鹿の角の話

自分の家に、鹿の角の附根を輪切りにして、それに笹に鯛かなんぞを彫刻した印籠の根附があつた。忘れたやうな時分に、家の何處かしらに轉がつて居たものである。何でも祖父が若い頃にやつた事だと言うた。仕事からフイと歸つて來たと思つたのに、何處にも姿が見えなんだ、方々探すと、土間の向座敷を締切つて、その中でコツ〳〵何かやつて居たさうである。何でも二日か三日、ろくに飯も喰はないで、えらい骨を折つたと言うた。今一ツ、これは何でも無い、只の三叉の角があつた。何時からあつたと無しに背戸の庇に吊してあつた。時折笊が引掛けてあつたりしたが、吊つた紐が切てからは、押入の隅などに放つてあるのを時折見かけた。家の誰やらが、山から拾つて來たのだと言うた。自分の家には、その他に鹿の角のあつた事を記憶せぬが、隣家へ行くと、カマヤ(納屋)の軒に、五ツ六ツも吊して、それに簑が掛けてあつた。

以前は何處の家でも、軒に鹿の角を吊して、簑掛けにしてあつた。さうかと思ふと土間の厩の脇の小暗い處に吊して、作り立の藁草履が引掛けてあるのもあつた。大黑柱の眞黑に煤けたのに吊して、枝の一ツ一ツに、種袋が結びつけたのも

あつた。同じやうなのを兩方に下げて、土間の掛竿の吊りにして、手拭や足袋を引掛けた物もあつた。

かうした角は、何時から吊してあつたか、忘れてしまつた程だつた。家が以前狩人だつたために持つて居たり、狩人から手に入れたのもあつた。或は又、山仕事に行つて、拾つて來た物もあつたのである。

或女は、正月にモヤ(薪)を刈りに行つて、其處で拾つた事があると言うた、最初薪木の枝に引かゝつて居るのを見附けた時は、びつくりしたさうである。その日に限つて、體中が溶けるやうに懶るかつたなどゝ言うた。又或男は、夏の頃山へフシ(五倍子)の實を採りには入つて拾つたと言うた。山の峯へ出て、一休みして、煙草に火をつけると、足元に、今しがた誰かゞ置いてゞも行つたやうに、三ツ又の角が落ちて居たさうである。

某の男は、秋カワ茸を採りに行つて、寒い日陰山の雜木の下で、落葉を引掻き廻す内、何年か雨に洒らされて、骨のやうになつた、二又角を拾つた事があると言うた。

かうして拾つて來た角は、何本でも軒に吊して簑掛けにしたのである。一度吊せば吊縄の腐らぬ限り、幾年經つても其處に下つて居た。雨の日など、グッショリ濡れた簑を、その枝に掛けて入口の敷居を跨いだのである。

それ等の角が、今はもう何處の家にも無かつた。角買男に賣つたのもあつた。春秋の大掃除に外したまゝ、子供が玩具にする内、何時か見えなくなつたのもあつた。未だ角に枝の咲かない、若鹿の角の一方に縄を通して、莚織りの仕上に使つた物などは、つひ昨日迄土間の壁に下げてあつたやうに思つたが、それもゝうつた見えなかつた。

時偶鹿の角が座敷に吊してあれば、熱さましになると言うて、一方の端をひどく削つてしまつたやうな物だつた。こんな物でない限り、もう無くなつてしまつ

たのである。鹿が亡びると一緒に、その角も又、忽ち消えてしまつたのである。

五　鹿皮のタツ、ケ

鹿の角が忽ち家々から消えて了つたのも、實は角買が盛に入込んで、買つて行つたのが、最も大きな原因だつた。

或家では、以前狩人だつたにも依るが、主人が昔風を改め得ない性分も手傳つて、もう何處の家にも無くなつてから、軒や土間の隅に幾本も吊してあつた。事實さうしてあれば、何彼につけて都合もよかつたさうである。

それが近頃になつて、角買が目をつけ出した。賣れ賣れと執こく責めるのに、遂に斷り切れなくなつて、若主人が全部引外して、纏めて賣つてしまつた。家中を探し集めたら、十七八本もあつたさうである。その金で先祖代々の位牌を拵へたと言うた。鹿の角が無くなつても、格別不自由はせなんだが、只簑などの置場が無くなつて、埒もなく其處いらへ丸めたり載せて置いたりして、始末が惡くなつたさうである。

角と共に、鹿が村へ遺して行つたとも言へる物に、鹿の皮のタツ、ケがあつた。秋から冬にかけて村々を歩けば、白い皮のタツ、ケを穿いた男を時折見た。麥畑に耕作して居たり、山から薪を負つて出て來たりした。多くはタツ、ケと同じやうな、老人であつた。畑などに穿いて出ると、忽ち皮の色が汚れてしまつたが、一日山を歩いて來れば、木の枝や茨で洗濯

鹿皮のタツ、ケ

鹿皮のタツ、ケ

されて、眞白になつたさうである。

家々を尋ねて廻つたら、どの家も同じやうに、以前はあつたがもう無いと言ふ。老人が死んでから、久しく物置に投げ込んで置く内、いつか蟲が附いて居たのに、慌てゝ谷へ捨てたのもあつた。ボロと一緒に、棒手振などに賣つたのもあつた。女達が少しづゝ剪つて、針止めや針山を作り〳〵する内、紐ばかりになつたのもあつた。よく〳〵丹念な心掛の善い家か、老人でもある家の外は、無くなつて居たのである。律義者で通つた或老人は、親類への年始廻りに、必ず著けて來たと言ふ。

以前はタツヽケ屋と言ふ專門の職人が、時折廻つて來たさうであるが、多くは大鹿を獲つた毎に狩人自身が拵へたものである。何でも以前のタツヽケは、鹿が二頭なくては、作れぬとも言うた。前に言うた、鳳來寺三禰宜の一人だつた平澤某は、作るに妙を得て居て、方々から頼まれたものと言うた。そのタツヽケを、未だ大切に藏つてある家もあつた。

いろ〳〵の話を綜合すると、鹿皮のタツヽケを狩人が着けたのは、餘り古くは無かつた。以前は物持などでない限り、滅多に着けなんだ。狩人が、山で雨に遇つた時など、慌てゝ脱いで丸めたと言ふからは、よく〳〵大切な狩衣であつたのである。

六　鹿の毛祀り

狩人が鹿を擊つた時は、其場で襟毛を拔いて山の神を祀つた事は、猪狩の毛祀りと何等變つた事は無かつた。只鹿に限つての慣習として、其場で臟腑を割いて、胃袋の傍にある何やら名も知らぬ、直徑一寸長さ五六寸の眞黑い色をした物を、

山の神への供へ物として、毛祀りと一緒に、串に挿し或は木の枝に掛けて祀つた。これをヤトオ祀りと言うた。ヤトオは前にも言うたが、矢張り串であつた。その眞黑い物は何であつたか、狩人の悉くが名を知らぬのも、不思議だつた。腎臓だらうと言うた人もあつたから、或はさうかも知れぬ。ずつと以前は、兩耳を切つて、ヤトオ祀りをしたと言ふが、近世では耳の毛だけを串に挾んで祀る者もあつた。然し後には臓腑を割く事をも略して、只毛祀りだけで濟ましたものもあつたと言ふ。

狩人としては、一度び傷を負はした獲物は、たとへ二日が三日を費しても、後をとめて倦む事を知らぬのが嗜であると言うた。某の狩人は、或時朝早く、出澤の村のコヤン窪で、一頭の鹿を追出した時、鹿は蕪地に峯へ向けて遁げ去つた。それを何處迄もと追縋つて、或時は山續きの谷下（やげ）の村を追ひ通し、更に引返して出澤の村の東に當るフジウの峯に追ひ込み、峯を越してその日の午過ぎには、瀧川の村に出た。又もや山に追込んで、それからは段々山深くは入り、日の暮方には瀧川から一里半山奥の、赤目立の林に追込み、又もや峯一ッ越えて作手（つくで）の荒原（あはら）村の手前の舟の窪で、やつと仕止たと言うた。十六の年から狩をしたが、此の時程の骨折りは先づ無かつたと言ふ。

同じ男が舟著連山の七村で、大鹿を追出した時は、その鹿が峯から谷、谷から村と、終日目まぐろしい程遁げ廻るので、何處迄もと追つてゆく内、行く先々で、その鹿を目がけて鐵砲を放す者があつた。大方他の狩人達も、目がけて居るとは豫期して居たが、最後に大平の奥に追詰めて斃した時、其處へ集つて來た狩人を數へると、總勢三十六人あつた。而もその狩人連が、放した丸は全部で十三發で、その十三發が一ッ殘らず中つて居たには、呆れ返つたと言ふ。三十幾人の狩人が何の連絡も無しに、一ッの鹿を一日追通したのである。こんな馬鹿々々しい事は、昔も聞いた事が無いと、みんなして大笑ひに笑つたさうである。

さうかと思ふと、狩人は一人で、獲物ばかりが多くて、弱つた事もあつた。或時出澤の茨窪（はらくぼ）の人家の背戸へ一匹の鹿を追込んだ狩人は、思ひがけなく行手の木立から、雄鹿ばかり七ツ、モヤ〳〵と角を揃へて走り出したのに、狙ひつける的に迷つて、悉く逸してしまつた事があつた。その狩人の話だつた、狩の運は別として、雄鹿が七ツ角を揃へて駈け出した處は賑やかなもので、見た目だけでも豐樂であつたと言ふ。

前の話もさうであるが、かうした出來事を總て山の神の手心と謂うたのである。

七　山の不思議

山の神の手心から、獲物を匿される事は、前の猪の話にも言うた。それとは異つて、現在捕つて其處に置いてある獲物を、ちよつとの間、水を呑みに谷へ下つたりした隙に、影も無くなる事があつた。四邊に人影も無い深山の中であつて見れば、不思議と言ふより外なかつた。狩人はさうした時の用意に、獲物の傍を離れる時は、鐵砲と山刀を上に十字に組んで置いた。或は半纏などを掛けて置く事もあつた。鳳來寺山中などで、時折さうした目に遇つた。山犬の所爲とも言うたが、或は山男のなす業とも信じられた。

鳳來寺山は、全山九十九谷と言傳へて、地續きの牧原御料林を合せて、殆ど四里四方に亘る一大密林であつた。山中の地獄谷と稱する所などは、密林中に高く瀧が落ちかゝつて、風景絶佳であると言うたが、一度び奥へ入込めば、出る事は叶はぬとさへ言うた。その爲め一部の狩人の外消息を知る者も無かつた。偶々鰻釣りには入つた者の談では、思ひの外に谿川の樣が綺麗で、嘗て釣を試みた者もあるらしいと語つた。隨分久しい前の話らしいが、八名郡能登瀨村の某家では、

牧原御料林から、不思議な裸體の青年を二人捕へて來て、農事を手傳はせたと言ふ。力が強くて主人の言付をよく守つたが、言葉が更に通じなくて困つたと言ふ。或は山男でないかとも言うたが、それ以上詳しい事は聞かなかつた。

鳳來寺山から東に當つて、三輪川を隔てた八名郡大野町の奥の、山吉田村阿寺（あてら）は、ひどい山間の部落であるが、部落内に七瀧（なたき）と言ふ瀧があつた。その水源である栃の窪からハダナシの山へかけての山中は、昔から狩人が獲物を奪られると言傳へた場所だつた。現に經驗した者はもう聞かなんだが、その山に住むヒメン女郎（姫女郎）の仕業と謂うた。而も一方には、山の主が美しい片脚の上蔦と言ふ傳說もあつた。附近へ入込む者が、紙緒の草履を穿いて居ると、必ず片つ方を奪られたと謂ふのである。

山中で紙緒草履を穿く者も無かつたと思はれるが、實は別の話が絡んで居たのである。狩とは何の關係も有たぬ餘計な事だつたが、話の次手にヒメン女郎の傳說の結末をつけておく。

前言うた七瀧の上に、子抱き石の出る個所があつた。子抱き石とは、石の中に更に別の小石を孕んだものである。子種の無い婦人が、其處へ行つて、一ッを拾つて懷にして返れば、懷姙すると言ふ言傳へがあつた。女連れなどで出かける者も尠なくなかつた。その折紙緒草履を穿いて居れば、必ずヒメン女郎に奪られたと言うたのである。現に草履を奪られて、いつか裸足になつて居たと云ふ女もあつた。

八　鹿に見えた砥石

姫女郎の仕業かどうかは知らなんだが、丸山某の狩人が、明治二十年頃の事、

鳳來寺山續きの、長篠村柿平（かきだいら）の山で、仲間二人と追出して撃つた鹿は、確かに右の後肢を傷つけたと言ふ。後肢を引摺りながら、山から谷へ、雪の眞白に降積つた上を、村の卵塔場を拔けて走り去る姿を明らかに見屆けた。それにも拘らず後には肢跡こそあれ一滴のノリ（血）も零れては居なかつた。脂肪の多い猪には間々ある事だつたが、鹿には嘗て無い不思議であつた。遂がに仲間の一人は怖氣づいて、再び追ふ事を肯かぬので、そのまゝ遂に見遁したと言うた。然しどうしても諦められず、翌日更に狩出して、見事胴中を撃つて仕止めたと言うた。前日撃つた丸を調べると膝の骨を打碎いて居たが、如何にも血の流れた樣子は無かつたと言ふ。

同じ男が或年の十二月、八名郡七郷村名號（みやうこ）の山で撃つた鹿は、僅か七貫目に足らぬ雌鹿であつた。それが時ならぬに雪よりも白い斑が肌に現はれて居たと言うた。これも山の不思議であつたが、實は何でも無い病ひ鹿で、夏毛のまゝ毛替りのせなんだ迄であると言ふ。丸山某は、名代のがむしやら者だつたのである。

敢て不思議でも何でも無かつたが、某の男が鳳來寺村の清澤の谷で撃つた鹿は、二匹捕つてそれが揃つて、見事な四ッ又の角を戴いて居たと言うた。鹿の角は三ッ又を限りとしてあつた。形こそ變つた物はあつても、完全に四ッ又に岐れた物は、珍しかつたのである。

話は丸で異つて居たが、山の不思議を一段と具體化した話が、本宮山（ほんぐうさん）の口碑にあつた。本宮山は鳳來寺の西南方に當つて、豐川の西岸に聳えて居た高山である。頂上に國幣小社砥鹿神社の奥宮があつた。祭神は大巳貴命であるが、別に天狗だとも謂うた。或時麓に住む狩人の一人が、鹿を追うて山中にわけ入つて、最初の鹿は遂に見失なつたが、別に谷を隔てゝ一頭の大鹿の眠れるを見出した。直に矢を番へて放したが更に手應へは無かつた。幾度やつても同じなので、不審に思つて近づいて見ると、實は鹿と見たのは大なる砥石であつた。その時忽ち神意を感

じて、その砥石を神として祀つたと言ふ。或は鹿に化けて居た天狗の話（拙著「三州横山話」参照）などと、關係ある話かとも思はれる。

本宮山には、以前は澤山の鹿が居つたもので、而も此處に產した鹿は、他に較べて遙かに大きかつた。俗に本宮鹿と言うて、特種だつたのである。三又の鹿なら普通十七八貫はあつた。一番と言へば先づ二十貫處が標準であつた。食物の關係で斯く大きかつたと言ふ。角振と言ひ姿と言ひ、申分の無い鹿だつたさうである。

九　鹿撃つ狩人

もう五十年も前に死んだが、東郷村出澤の鈴木小助と言ふ男は、名代の鐵砲上手であつたと謂ふ。屋敷の前の柿の木には、いつも鹿の二ッ三ッは吊してある程だつた。或時家の縁先に居て、二ッの鹿を一度に撃ちとめた事があつた。朝未だ床の中にうと〳〵して居ると、前に起きた女房が、早向ふの道を引鹿が通ると呼ぶ聲に、ムックリ起上るか否や、枕元の鐵砲を取つて縁先へ出ると、如何にも見事な雄鹿が二ッ、後になり先になりして、谷向ふを、谷下村へ越す道を登つて行つた。その鹿が二つ重なり合つた時を待つて、打放した丸が見事に手前から後の鹿を筒抜けに斃したと言ふのである。

小助は名の如く體は至つて小さかつたが、鐵砲は名人であつたと言うて、今に噂が殘つて居る。猪鹿買ひが獲物拂底の折は、必ず小助の家へやつて來て、上り端へ寢込んださうである。すると澁々支度をして出かけたが、出かけ端に、若し鐵砲が鳴つたら、その方へ迎ひにお出でと言ふのが癖だつた。曾て一度も其言葉に誤りは無かつたさうである。小助も鐵砲上手に違ひなかつたが、獲物も又餘計

に居た事も事實だつた。

小助が鐵砲上手の話は未だあつた。その頃村の梅の窪と言ふ處に、性惡る狐が棲んで居て、時々村の者を惱ましたさうである。その狐が、小助の鐵砲ならチツトも恐しくないと嘲つたさうである。そして小助の老母に取憑いて、どうしても離れなんだ。これには道がの小助も弱つてしまつた。そこで或時鐵砲に紙丸を詰めて、一發天井に向けて放して置いて、今度は眞丸で擊つと嚇したさうである。それには狐が閉口して、明日の朝は間違ひなく出て行くからと、誓ひを立てたさうである。そんなら確かな證を見せよと掛合つて、行掛けに屋敷向ふの谷下村へ越す途中で、片肢上げて相圖をする約束をさせた。その代り擊つてくれるなと狐が念を押したさうである。承知して朝になるのを待つて居た。翌朝早く起きて屋敷から見て居ると、如何にも谷下村へ越す坂を、狐が一匹ブラリ〳〵登つて行つた、その内恰度屋敷の正面邊りへ來た處で、如何にも片肢上げて相圖をした。其處をドンと一發欺し擊ちに擊つてしまつたと言ふ。

此小助の兄弟であつたか、或は親類であるか判然記憶せぬが、長篠村淺畑(あさはた)に、某音五郎と言ふ狩人があつた。鹿狩には矢張り名代の剛の者であつたと言ふ。格別逸話としては聞かなんだが、或朝起きて戸を明けると、表の眞中に巨きな山犬が坐つて、口を開いて何やら嘆願する樣子であつた、傍へ寄つて口中を檢めて見ると太い骨が咽喉に立つて居る、それを除いてやると、嬉しさうに尾を振つて立去つた、そして翌朝になると見事な大鹿が、門口に持つて來てあつた。猪の話の中にも言うた山犬の報恩話の一ッである。

十　十二歳の初狩

鳳來寺山行者越の一ッ家に、五十幾年の狩人生活を送つて、名代のがむしやら者などゝ言はれた丸山某は現に生きて居る。行者越は鳳來寺の裏道で、以前は鳳來寺から遠江の秋葉山への道者路に當つて居た。昔役の小角が開いたと言ふ傳說の地で、或は小角が此處より登る事能はず、引返した跡とも言うて、別に行者返りの名もあつた。鳳來寺へ一里、麓の湯谷へ一里、文字通りの一ッ家であつた。

會つて話して居る間にも、昔の狩人はかうもあらうかと思はれる程、一本氣の氣儘さがあつた。而して何物の力をも信じない冷酷さが、言葉の端々に迄感じられた。話の中でも、てんで此方の言ふ事など耳に入れて居ない樣子で、言ひ度い放題を甲高い聲で喋舌つて居た。生れたのは更に山奥の、北設樂郡黑川在で、今の家へは養子ださうである。

生家も代々狩人だつたさうである。當人が狩の最初は、十二の年の秋、燒畑の傍で擊つた鹿だつた。初めの丸は尻に中つて惜しくも急所を外れたが、續いて遁げる鹿を追つてゆくと、遙かのタワで犬が止めて居た。そこで泡吹きの大木に身を凭せて、第二發を送ると、鹿は谷に向けて轉がり落ちたさうである。直ぐ後を探し求めて、藤蔓を取つて横に背負ひ上げたが、重いのと谷が險しくて、上る事が出來ない。仕方が無いので、鹿には上衣を脱いで掛け、自身は谷を上つて歸つて來た。そして遙かに我家を望む處迄來て、立木に上つて枝を叩いて相圖をしたと言ふ。其折家で下男同樣に使つて居た、乞食とも何ともつかぬ男があつて、それが迎ひに來てくれて運んだ。十六貫七百目あつたさうである。その鹿を、更に五里隔つた津具村の鹿買ひの處へ、一人で負つて出かけたが、折よく途中で鹿買ひに遇つて取引をした、二兩二分二朱に賣れたと言うて居た。

未だいたいけな十二の年に、十六貫餘の鹿を負つて歩く程の者だけに、子供の

頃から不敵者で、十七の時には早家を飛出した。そして山から山を渡り歩く内、今の家へ見込まれて養子になつたさうである。若い頃から獲物を追つて、何處とも知らぬ山中に、夜を明した事は、幾度であつたか知れぬ、それで居て更に疲れる事は知らなんだと言ふ。鳳來寺山麓の門谷の人々は、此男が山中で、百貫に餘る巨大な朽木を負うて歩くのを、時折見たと言うた。會つて見た感じでは、痩形のもう六十幾つといふ年配で、異常な體力を備へて居るなどとは思へなかつた。

一代の間に捕つた獲物は、鹿だけでも幾百を數へて、一冬に六十二の鹿を捕つた年もあつたと言ふ。もう三十年も前の事で、その頃は獵犬のよいのが居たさうである。タカにテジにフジだと、幾度か犬の名を繰り返して聽かせた。中でもテジと謂ふ犬は、一冬に九貫目以下ではあつたが七ッの鹿を捕つた事があると謂ふ。而して一度手負にすれば、後はそれ等の犬が追かけて肢を嚙切つたさうである。熊も七ッ捕つたと語つた、或時大木の高い洞に居るのを、一人で登つて行つて、山刀で前肢を叩き切つて斃したと言うた。その折の光景を旅の繪師に描かせたと言うて、粗末な掛軸を出して來て見せてくれた。惡いから默つて何も言はなんだが、功名談とは似もつかぬ、氣の毒な程貧弱な熊と狩人が描いてあつた。

十一　一ッ家の末路

丸山某の養家であつた行者越の一ッ家は、旅籠渡世もしたが、實は代々の狩人であつた。養父といふ人は、狩人こそして居たが、一方えらい劍術使ひで、由ある者の成れの果だらうとも謂うた。それで家には鎗長卷の類が幾振も飾つてあつた。體は四尺幾寸しか無くて、一眼のちつとも引立たぬ構へであつたが、劍を把つては並ぶ者は無かつた。行者の又藏と言へば、遠國迄響いて居たと言ふ。

どうした譯で代々こんな處に棲んで狩人をして居たかは聞かなんだが、家は草葺の大きな構へであつた。明治維新の折、此邊にも長州兵が幕府方の者の後を追うて入込んだ事があつた。拔身を提げた荒くれ武士が十六人、袴の股立をとつて鳳來寺道をやつて來た時は、街道筋の者は全部戸を締め切つて、隱れて居たと言ふ。その連中が行者越の家へかゝつた時、軒に吊してある草鞋を拔身で指して、幾何かと訊いた事から、店に坐つて居た又藏老人と喧嘩になつて、あはや十六人が飛びかゝるかと思はれた時、老人が落つき拂つて名を名乘ると、びつくり這ひつくばつて無禮を佗びたと言ふ。別れ際に老人が、誰やらにも行者の又藏から宜しくと言ふと、へゝッと叮嚀に挨拶して去つたなどゝ言うた。狩人としての逸話はあまり聞かなんだが、劍術使ひとしての話は未だあつた。

或時旅の劍客と術比べをやつたが、その武士が座敷に突立つて居て、やつと言ふと天井を一回蹴つて居た。これに反して又藏の方はやつと言ふ間に、二回宛蹴つて勝つたと言ふ。又近くの者が多勢集つた席で、誰でも宜いから俺を押へて見よと言うて、疊の下を潜つて歩いたが、それが速くてどうしても押へる事が出來なんだと言ふ。然しそれ程の又藏でも、たつた一度失敗した事があつたさうである。横山の某の物持とは懇意にしてよく遊びに行つた。そして其處の下男に、隙があつたら何時でも俺を打てと約束したさうである。然しどうしてもその隙が無かつたが、或日のこと又藏が主人と畑で立話をして居た、下男は知らぬ顔で傍で麥に肥料を掛けて居た。そして肥料を掛けながら畝を歩いて行つて、又藏の足元へ柄杓の先が行つた時、肥料のは入つた儘バッと脚を打つと、道がに避ける間がなくて着物の裾を肥料だらけにしたと言ふ。其時許りは俺に油斷があつたと云うて、閉口したさうである。

此男の娘が、前言うた養子を迎へたのであるが、女に似氣ない氣丈者であつた。或時一人で留守をして居ると、深夜に門を叩く者があつて、大野から來たが一宿

頼み度いと言ふ。その言葉に怪しい節があつたので、そつと二階に上つて外を覗くと、黒裝束の男が九人、手に手に抜身を持つて立つて居た。女房は鐵砲を片手に握つて、只今開けますと言ひながら、開けると同時にドンと二ッ丸を放したさうである。怪しい男達はそれに驚いて、慌てゝ前の坂を駈降りて行つた。中に一人腰を抜かした奴があつた。後から又仲間が引返して來て、其奴を引摺つて行つたさうである。

その女房は、もうとくに死んださうである。たつた一人血統を繼いだ男の子があつた。もう久しい前であるが雜誌少年世界の記者が、健氣な少年として誌上に紹介した事があつた。小學校を卒業すると間もなく八名郡大野町へ奉公に出て、その翌年かに、主人の子供が川に溺れたのを助けに飛込んで、共に溺れて死んでしまつた。昔を知る老人達の中には、ひどく惜んで居る者もあると聞いた。然しも何とも仕樣はなかつた。數年前その一ッ家も、引拂つてしまつたさうである。

十二　鹿の玉

行者越の一ッ家が潰れたのも、實は鳳來寺の衰運が大いに關係したのである。山内に藥師と東照宮を祀り、天台眞言の兩學頭が並び立つて、千三百五十石の寺封を與へられて全盛を極めた鳳來寺も、明治の改廢と數度の出火に遇つて、昔の面影はもう無かつたのである。

明治維新前、鳳來寺が未だ全盛の頃の事である。山内十二坊中の岩本院で、正月十四日の田樂祭りに、七種（なゝいろ）の開帳と言ふがあつた。開祖利修仙人が百濟から將來した瑠璃の壺、龍の玉、熊の角、鹿の玉、一寸八分の籾、淨瑠璃姫姿見の鏡、東照公佩用の鎧兜の七種で、一人十二文づゝの料金を取つて拜觀させたと謂ふ。

名前を聞くと何れも珍寶揃ひであつた。その後如何になつたか消息を知らぬが、その中の鹿の玉だけは、岩本院沒落の後、不思議な譯で取殘されて、附近の家に

鹿の玉

祕藏して居る。ふとした動機から一度見た事があつた。鷄卵大の稍淡紅色を帶んだ玉で、肌の如何にも滑らかな紛れも無い鹿の玉であつた。此類のものは、未だ他にも竊かに藏つてある家があつて、實は前にも見た事があつたのである。祕藏者は前から岩本院に緣故のある者であつた。いよ〳〵沒落の折、方丈がその者を前に呼んで、これだけは此土地に遺して置くとあつて、讓られたものと言ふ。其一方には、ドサクサ紛れに盜み出したなどゝ、惡口を言ふ者もあつた。何れにしても傳へ遺して居たのは目出度かつた。

かゝる物が、如何にして鹿の肉體中に生じたかは別問題として、土地の言傳へに依ると、澤山の鹿が群れ集つて、その玉を角に戴き、角から角に渡しかけて興ずるので、これを鹿の玉遊びと謂うて、鹿が無上の豐樂であると謂ふ。あんな玉を角から角へ渡すのは、容易であるまいなどの事は一切言はぬ事にして、扨て其玉を家に祕藏すれば、金銀財寶が自づから集り來ると謂ふ。自分などが聞いた話でも、舊家で物持だなどゝ言へば、彼處には鹿の玉があるげなどゝ言うた。

狩を渡世にした者でも、滅多には手に入らぬ、よく〳〵の老鹿でないと獲られ無いと言うた。それで一度び手に入れゝば、物持などに隨分高く賣れたさうである。前に言うた行者越の狩人なども、曾て手に入れた事があると聞いた。

或はそれに生玉死玉の區別があつて、如何に見事でも、鹿を殺して獲た物では何の効めも無いと謂ふ。群鹿が玉遊びに興じて居る、それでなくば駄目だと言うのである。鳳來寺の岩本院にあつたのがそれだと、祕藏して居た老人は改めて掌に取つて見せた。そしてかう握りつめて居ると、自づと溫りがあつて、幽かに脈

が打つて來るなどゝ言うて眤と目を瞑りながら、不思議なる脉を聞かうとするやうな風であつた。最後に叮嚀に紫の袱紗に包んで、元の箱に納めると、奥まつた部屋へ藏ひに立つて行つた。

通例玉を祕藏して居る者は、金かなどのやうに、祕密にして、玉があるなどとは、更におくびにも出さなんだのである。さうしてコツソリ祕藏して居る者が、案外其方此方の村にあるらしいのである。

十三　淨瑠璃御前と鹿

鳳來寺の傳說では、光明皇后は鹿の胎內より生れ給ふたとなつて居る。開祖利修仙人が、嘗て西北方にある煙巖山の岩窟に籠つて修法中、一日山上に出でゝ四方を願望する內、偶々尿を催して、傍の薄に放したる處、折柄一匹の雌鹿來つて其の薄を舐め、忽ち孕んだとある。月滿ちて玉の如き女子を產んだが、仙人修法中とて其處置に窮し、ひそかに其子を人に托して鄕里奈良に遣はし、一日あるやんごとなき邸の門前に捨てしむと言ふ。その女子成長して後に光明皇后となり給うたが、鹿の胎內に宿り給ひし故、生れながらにして足の指二ツに裂け、恰も鹿の爪の如くなりしと言ふ。皇后之を嘆き給ひ、宿業滅亡の爲め鳳來寺に祈願を籠め、兼て御染筆の扁額を納め給ふと言ふのである。これは鳳來寺々記の中に載せた事であつたが、別に元祿時代に書いた、同寺所藏の掃塵夜話と言ふ寫本には、その事を實際化して、利修無聊に依つて、夜々西方山麓の里に通ひ、賤の女と契り遂に一女を設く云々などゝ、最もらしく說明してあつた。

然し自分等が耳で聽いた傳說では、之とは稍趣を異にして、淨瑠璃御前の話になつて居た。矢作（やはぎ）の兼高長者が、子のない事を憂いて、藥師堂に一七日の參籠を

して、子種を一ッ授け給へと祈つた處、恰も滿願の夜の夢に、藥師は大なる白鹿となつて顯れ、汝の願ひ切なるものあれ共、遂に汝に授くべき子種は無ければとて、一個の丸を授けらると見て、胎むと言ふのである。又別の話では、藥師が白髪の翁となつて現はれ、鹿の子を授くと告げて消失せ給うたとも謂うた。軈て月滿ちて生れた子が淨瑠璃御前で、輝やく如く美しかつたが、足の指が二ッに裂けて居る事を、長者が悲しんで、それを隱す爲め布を以てその足を纏うて置いたが、これが足袋の濫觴であると言ふ。

今から三四十年前迄は、淨瑠璃御前一代の譚として、その事を謠つた文句を歌つて居た者もあつたさうであるが、今日では、如何にしてもそれを聽く事は出來なかつた。又村の處々に、御前の姿を描いた小さな掛物を、藏つてある家もあつたと言ふ。

一方鹿の話は、それからそれと糸を引いて、妹背山の入鹿の話に迄持て行つた。

鳳來寺の東方山麓に、東門谷と言ふ山に圍まれた小さな部落があるが、村としては古かつた、そこの彌右衞門某の屋敷の背戸に、いるかが池とて形ばかりの赤錆の浮いた池があつたと謂ふ。鹿が入鹿大臣を產んだ處故に斯く言うたとは恠しかつた。その池の水を笛に濕して吹けば、如何なる鹿でも捕れるなどと言うたが、果して今も跡があるかどうか知らぬ。或は鹿が子を產んだと言ふ傳說と、いるかが子を產んだ話と、何れかを誤り傳へたかとも考へられる。

東門谷から峯一ッ越えた、鳳來寺村峯の地內にある產田(うぶた)は、前に言うた鹿が皇后を產んだ跡と言うて居る。

十四　親鹿の瞳

開創の始めから、鹿とは因縁深い鳳來寺であつたが、明治に改まつたと思ふと、もう馬鹿々々しい鹿を弄り殺しにした話がある。

前にも言うた岩本院は、本堂の西方寄り、俗に大難所と呼んだ高い岩壁の下にあつて白木造りの立派な建物だつたさうである。その岩壁の上を、毎朝きまつて通る五六匹の引鹿があつた。寺男の一人が、どうからそれを知つて居たが、何分山内の事で、どうする事も出來ぬ。そこで生捕りにして山内を引出せばよいと、勝手な理窟を考へた。それで或日麓の門谷へ下りて、若者達を語らつて、青竹を籠目に組んで、鹿が踏込んだら動きの取れぬやうな罠を掛けたさうである。翌朝行つて見ると、十四五貫もある雄鹿が掛つて居た。それを多勢して寄つて集つて頸から肢に滅茶苦茶に縄を掛けた。さうして口へは馬にするやうな轡を嵌めてしまつた。二人の男がその口を把つて、多勢が後から鹿の尻を打ち打ち、引出したさうである。そして何百段かの御坂を降つて、門谷の町へ出て來た。軒毎にそれを見せびらかしながら、正月初駒を曳くやうな氣で、彼方此方多勢の見物の中を引張り廻したさうである。鹿は如何にも觀念したやうで、ちつとも抵抗せなんださうである。町の有力者の庄田某が、道がに見兼ねて、その鹿は助けてやつてくれと、幾干の金包を取らしたさうである。然し若者達は、其場だけ承知して、軈て村端れから再び山の中へ引込んで、殺して煮て喰つてしまつたと言ふ。よくよく鳳來寺も没落の凶兆が來たと語り合つた者もあつたと言ふ。實は鳳來寺の權威も地に墜ちて、一山が引くり返るやうな騒ぎの、明治四年の事だつたさうである。

まるきり弄り物では無かつたが、狩人の中には、生れて間も無い小鹿を囮にして、親鹿を捕る者があつた。狩人が夏山を稼げば、崖の下やナギ（山崩れ）の跡などに、滑り込んで居る子鹿を拾ふ事があつた。さうした時は、親鹿が近くに居る

事は判つて居るので、直ぐ殺さずに、木に繋いで置いて、ギー〳〵鳴かせて親鹿を誘びき出したのである。親鹿は子鹿の姿が見へる間は、幾日でも其處を去らなんだ、何處かしらから、昵と見て居たのである。若し狩人が居れば其の目を注意して居るので、此方がそれと氣附いて瞳と瞳とが遇ふと、直ぐ遁げてしまつた。それで此獵法は、餘程の技巧を要するさうである。何度も失敗を重ねると、遂こちらも意地になつて、一日位其場に寢込んで待つ事もあつたが、さうなつては、決して撃てる者ではなかつたと言うた。子が捕られゝば、親が見えがくれに見守つて居たが、親鹿を撃つと、子鹿が其傍を離れなんださうである。犬でも居れば格別だが、さもない時は、親鹿を舁いで來ると、後から隨いて來たさうである。

餘計な事だが、子鹿の事を矢張りコボウ又はコンボウと謂うた。而して二歳鹿の角に未だ枝の無い物を、ソロ又はソロッボウと言うたのである。

十五　鹿の胎兒

肢腰が未だ不完全で、山の岨から滑り落ちるやうな子鹿は、親鹿一ッ捕る囮にもろく〳〵ならなんだが、それが未だ親の胎內にある間は、狩人にとつては別に一匹の鹿を捕るよりも利得になつたのである。

鹿の胎兒をサゴと謂うて、その黑燒は婦人の血の道の妙藥として珍重したのである。又鹿の胎籠り(はらごもり)とも言うて、產後の肥立の惡い者などには、此上の妙藥は無いとした。今日ではさう見かけ無くなつたが、以前は何處の村へ行つても、眞蒼い血の氣の無い顏をした女が、一人二人はきつとあつた程で、從つて需要も多かつたのである。

明治初年頃、普通の鹿一頭が五十錢か七十錢程度の時に、サゴ一ッが七十五錢から一圓にも賣れたと言ふから、狩人が何を捨てゝも孕み鹿に目をつけたのは無

理もなかつた。その爲め一年に一ッしか增へぬ鹿の命數を、縮める事など考へる餘裕はなかつたのである。

サゴは春三月、親鹿が肢に脛巾を穿いた時期が、最も効驗があると言うた。脛巾を穿くとは鹿の毛替りを形容した言葉であつた。鹿は春先き木の芽の吹き初める頃から、冬の間の黑味を帶んだ毛が拔け初めて、初夏田植の盛り頃には、すつかり赤毛に替つて、眞白い斑が現はれた。この時期を、五月の中鹿と言うて、鹿が鹿の子を着たと言うたのである。毛替りは肢の蹄の附根から初まつて、段々上へ及ぼして來るので、膝迄替つた時が、卽ち脛巾を穿いた時だつた。此時期に遠くから見ると、如何にも柿色の脛巾を着けたやうに見えたさうである。月で言ふと、その時サゴは五月目であつた。鼠より心持ち大きかつたが、肌には早美しい鹿の子の斑が見えた。

別に、サゴの最も効驗ある時期を、親鹿の腹を割いて取出した時、掌に載せて眺める程度が宜いとも謂うた。

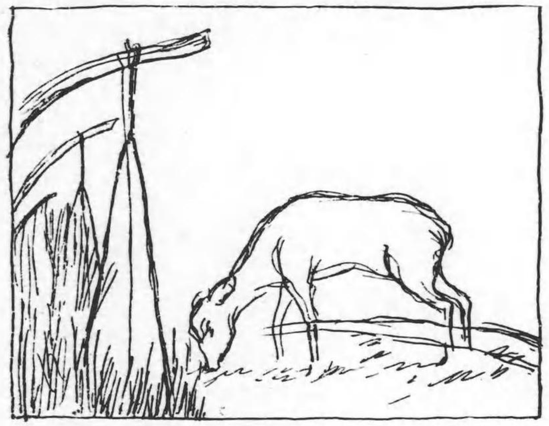
晩春花が散り盡した頃は、サゴは早や猫程に成長して、もう生れるに間もなかつた。さうなると効驗が薄いと言うて高くは賣れなかつた。其處で猜い狩人などは、今一度皮を剝いで形を小さくした。眞赤な肉の塊のやうな物を、道がに氣が咎めるか、遠い見知らぬ土地へ持出して賣つたさうである。

鹿の肉も又血の道の藥だと言うたが、角も又熱浮しになると言うて、少しづゝ削つて用ひる者があつた。

十六　鹿捕る罠

冬の終りから春先へかけて、鹿が人家の小便壺に附いた。鳳來寺山麓の門谷な

ごでも、以前は夜遅く用足しに出ると、二ッ三ッ位揃つて、暗がりへコソ〳〵影を消す姿を見る事は決して珍らしく無かつた。山犬などもさうであるが、鹿は殊に此時期に鹽分の不足を感じたのである。



ハネワにて鹿を捕る圖

山中などでも、人が用足した後を索めて遠くから集つて來ると言ふ。

狩人がハネワと言ふ罠で、鹿を捕つたのはその時期であつた。ハネワは卽ち跳輪で燒畑近くなどの、大體鹿の寄りさうな地を撰んで設けたのである。その方法は、先づ鹿を吊し上げるに充分な立木を基にして、その前にゴ(落葉)を推く搔き集め、落葉の繞りに枯枝の類で柵を作つて圍つた。而して一方口を明けて置いて、そこに跳輪を仕掛けたのである。最初に撰んだ立木を曲げて來て、それに藤繩で輪を拵えて罠の口に置いて、一方別の藤繩をバネ仕掛にして、曲木を押へて置いたのである。仍ち圍ひの中の落葉へ小便をして置く。鹿が來て中の落葉を舐めようと頸を差出すと、バネに觸れて外れて、曲木が舊(もと)に跳返る勢で、藤繩の輪で頸を括り上げるのである。何だか說明がやゝこしくなつたが、要するに小便を舐めにかゝる鹿の頸を、曲木の跳ねる力で括り上げるのである。

一人がハネワで鹿を捕ると、吾も吾もと其の傍へ仕掛けたさうである。一ヶ所に同じやうな罠が、三ッ四ッ位竝ぶ事は珍しくなかつたと言ふ。然し後から眞似た物へは不思議に掛らなんだ。三ッも四ッも並んだ中で、同じ罠にばかり、三日も續けて掛つた事があつたと言ふ。不思議な事に、ハネワに掛つたのは雌鹿ばかりで、雄鹿は曾て掛らぬと言うた。或は雄鹿だと角が邪魔になつて、旨く輪が頸

に掛らぬかとも思ふが、狩人の一人はさうは言はなんだ。雌鹿の殊に子持鹿が小便を好いて掛ると言ふのである。して見れば人の尿に附いたのは、獨り傳說の雌鹿ばかりでは無かつた。

又狩人の話では、その頃の鹿は朝、枯草に置いた霜を舐めて居ると言ふ。

ヤトウにて鹿を捕る圖

鹿を捕る方法には、ハネワの外にヤトがあつた。ヤトの事は已に猪の話に說明した通りである。それを燒畑などのワチの陰に置いて、中に飛入る鹿を捕つたのである。夏分蕎麥の種へ菜種を混せて播くと、蕎麥を刈取つた後に、青

青と伸びて居た。山が冬枯れるに從つて、鹿が附いたのである。高く結つたワチに前肢をかけて、中へ飛越すと其處にヤトの尖が鋭く光つて居た。朝早く見廻りに行くと胸や腹を深く貫かれて、死んで居る鹿を見出す事は珍しくなかつた。

一冬にひとつ畑で、七ツも捕つたなどゝ、名も無いヘボクタ狩人の、手柄話の種にもなつたのである。

十七　大蛇と鹿

大蛇が鹿を追つたと言ふ話がいろ〳〵あつた。

瀧川の村から小吹川に沿うて、一里程山奥へ入込んだ處に、小吹と言ふ一ツ家があつた。そこの山には大蛇が棲むと專ら言傳へたが、曾て鳳來寺村布里から、

山越しゝて來た男は、行手に松の大木が倒れて居ると思つて近づくと、蛇の胴體だつたと謂うた。或時瀧川の狩人が、朝早く其處へ引鹿を擊ちに行くと、見上るやうな高い崖の上から鹿が轉がり落ちて來た、不思議に思つて崖の上を仰ぐと、今しも一匹の大蛇が、鎌首を差出して下を覗いて居るのに、びつくりして遁げて來たと謂うた。

伊那街道筋の、双瀬（ならせ）にも略同じやうな話があつたと言ふ。其處に高く切り立つたやうな崖があつて、崖の上が宙に差出たやうになつた場所ださうであるが、或時狩人が其下に休んで居ると、崖の上から何やらえらい音をさせて落ちて來た物があつた。見るとそれが鹿で、前の話と同じやうに蛇に追はれて來たと言ふのである。同じやうな話は未だ他でも語られて居たが、たゞ八名郡石卷村にあつたと言ふ話だけは、更に不思議な物語が附いて居た。

極く新しい事だと言うて、その者の名前迄聞いたがもう忘れてしまつた。某の狩人が朝暗い内に起きて、石卷山に鹿擊ちに出かけて、山の中腹の崖の下に行つて夜明を待つて居たと言ふ。その崖と言ふのは所謂懸崖で、高い岩が屋根のやうに差出して、崖の上は遙かに峯續きになつて居る。アギトとも言うて、更に上には登る事の出來ぬやうな地形である。その岩の頭へ姿を見せる鹿を打つためだつた。すると夜の明方に、思ひがけなく、岩の上から、一匹の大鹿が轉がり落ちて來た。驚いて崖を見上ると、高い岩の上から、二間もある鎌首を差出して、恐ろしい大蛇が下を覗き込んで居た。びつくりして直ぐ鐵砲を取直して、蛇を目がけて放したと言ふ。すると恐ろしい音を立てゝ蛇は手繰るやうに落ちて來て、えらい苦しみをして死んださうである。狩人はそのまゝ鹿を引舁いで、ドン〳〵家へ遁げて來ると、戸口に女房が眞蒼な顏をして倒れて居たと言ふ。驚いて助け起して段々譯を聞くと、女房は夫を送り出してから一眠りする内、夢を見たのである。今しも一匹の大蛇になつて、鹿を追かけて行くと、その鹿が崖の下へ轉がり落ち

たので、上から覗き込むと、下に狩人が居ていきなり鐵砲で自分を撃つたと迄は知つて居たさうである。それからは夢中で、床を轉がり出して門口迄來ると、其處に倒れて氣を失なつたのである。段々聞いて見ると、男が蛇を撃つた時と寸分異はなんだと言ふのである。

何だか未だ缺けた點があるやうである。此話を聞いたのは小學校へ通つて居る頃で、學校へ行く途中だつたと思ふ。自分より四ッ五ッ年上の子供が、昨夜中村（寶飯村中村）の伯父が泊つて父に話したのを、脇から聞いたと語つたものである。今では子供もその父も死んでしまつて、もう詳しい事を聞糺す宛も無い。同じ八名郡の鳥原は、昔から大きな蛇が澤山居た處と言うた。或時鹿を咥へた大蛇が、山の裾を、草を押分けて走つて行く處を見たと言ふ話もあつた。

十八　木地屋と鹿の頭

嘗て長篠驛から海老（えび）へ行く街道で、道連れになつた男があつた。いろ〳〵世間話をする内、北設樂郡段嶺村の者と知れた。その折聞いた事であるが、段嶺の奥の段戸山御料林中の、水晶山の木地屋部落へ入込んだ時に、其處の有力者らしい家に、見事な鹿の頭が二ッ、角づきのまゝ座敷に飾つてあつたさうである。何とかして一ッ讓つて呉れぬかと、掛合つた末に、三十圓迄出すと言うたが、遂肯はなんだと言ふ。何でも極く新しい木地屋部落で、最初は二三戸であつたのが、忽ち二三十戸に增へたと言うた。其處へ初めて木地屋が入込んだ頃には、附近の山中に、十五六づゝも群になつて、遊んで居る鹿を見る事は珍らしくなかつたさうである。段戸山の鹿は昔から有名であつた、次の話も同じ山中の話である。

某の杣が山中の小屋に働いて居た時の事、一日ひどく雪が積つて、仕事が出來

ぬ處からぼんやり小屋の前に立つて居ると、向ひの日陰山に鹿が二匹遊んで居た。そこで退屈凌ぎに仲間を誘ひ合つて、其鹿を遠巻きにして追立てた。すると鹿は一氣に峯を越して遁げてしまつたので、みんなして笑ひながら小屋へ引返して來ると、途中の一叢伐殘した茂みの中に、何やらムク〳〵動く物がある、よくよく見るとそれが鹿の群であつた。凡そ二十許りも居たと言ふが、尻と尻とを押合ふやうにして、木の影に塊り合つて居たさうである。直ぐ追散してしまつたが、前の鹿を追つた時、どうして遁げなかつたか、不思議だつたと言うた。日露戰爭の濟んだ年あたりで、某は三十を少し出た年配であつた。

又自分の村の山口某は、山中の杣小屋へ、村から飛脚に立つた時、途中の金床平の高原で夥しい鹿を見たと言うた。途中の田峯村から日を暮して、金床平へ掛つた時は、八月十五夜の滿月が、晝のやうに明るかつたさうである。見渡す限り廣々とした草生へ掛つて、初めて鹿の群を見た時は、びつくりしたと言ふ。丸で放牧の馬のやうに、何十と數知れぬ鹿が、月の光を浴びて一面に散らかつて居たさうである。人間の行くのも知らぬ氣に、平氣で遊んで居たのは、怖ろしくもあつたが、見物でもあつた。中には道の中央に立塞つたり、脇から後を見送つて居るのもあつた。

夜遲く目的の山小屋へ着いたが、其處へ行く迄の間、高原を出離れてからも、五ッ六ッ位群になつたのには、數へ切れぬ程遇つたと言うた。明治二十年頃で、山口某はその頃二十五六の青年であつた。

十九　鹿の大群

今から五十年許り前、段戸山中の、菅原の奥の中の河原で、川狩りの人夫達が、

材木を搬んで居ると、傍の深い萱立の中から、木の枝を振翳した裸形の山男が、大鹿を追かけて來たと言ふ。その連中が段々材木を流して來て、自分の村へ宿をとつた時、その事を語つたさうである。

鹿笛

此話は、その中の河原附近が、もう嘘のやうに木を伐り盡してしまつた後の事で、更に三里程奥へは入つた處の事だつた。

明治三十年の冬ださうである。何時になく寒い年で、此模樣では、もう長く山には居られぬなどゝ言ふ程だつた。某の杣の居た小屋には、仲間が八人居たさうである。前の日迄に豫定の仕事が終つたので、其朝は早く起きて、新しく持場を決めるために、山割の相談をしたさうである。みんな小屋の前に並んで、下の窪を見ながら話をして居た。山の朝は未だ暗かつた。而も其朝に限つて、窪の底一面に霧が立罩めて居る。某の男は他の連中とは一人離れた處から見て居た。眤と見て居る内、霧がモコ〳〵と動くやうで、上へ上へと擴がつて來る。そして段々近づくに從つて、色が淡紅いやうに變つて來る。眤と見て居る内、アッと聲を揚げんばかりに驚いたさうである。今迄霧とばかり思つて居たのが、何千何百と、數限りなく續いた鹿の群だつた。次から次へ湧いてゞも來るやうに、先登が脇の峯へ向けて、走つて居たさうである。その時はもうみんな氣がついて居た。さうして誰一人聲を立てる者もなかつた。凝と立つたまゝ、その群が全部通り過ぎる迄、見て居たさうである。

それから急に山が怖しくなつて、後一日働いて、全部小屋を引拂つて歸つてしまつたと言うた。某はその時、二十一か二だつたさうである。

斷片的な、とりとめの無い話の續きが遂長くなつた。極めて狹い、東三河の一

小部分、僅か五方里に足りない間でも、其處に棲息した鹿は自から區別があつた。北から南へ、鍵形に線を引いた寒峽川豐川の右岸地方に繁殖した鹿は、川の左岸遠江へ掛けて居た物より遙かに長大であつた。前に言うた本宮鹿がそれである。これに反して遠江の山地に近づくに從つて、だんだん小さくなつて、俗に遠州鹿と稱した物は、雄鹿の三ツ又でも七八貫が止りであつた。山に岩石多く食物が充分でない爲めとも言うた。鹿の生活にも又地の利が影響したのである。

狸

一　狸の怪

狸と云ふ奴は、たしかに變な奴だと、始終狸を捕つて居る男が話した事があつた。未だ五年と經たぬ新しい話である。村の池代の山で穴を見付けて、仲間と二人で掘つたさうである。いよ〳〵奥まで掘つてしまつて、枯葉を敷きつめた寢床迄掘り詰めたが、狸の姿は薩張り見えぬ。こんな筈はない、たしかに居る筈だが、何處か拔穴でもあるのぢやないかと、掌で撫でるやうにして探したが、拔穴も無ければ狸も居らぬ。それにもう一面の岩が出てしまつて、これ以上掘つてゆく先

もない。然し深い横穴で、中が暗くて仕方がない、蠟燭でも點して見たらと、わざ〳〵一人が里へ出て取つて來て、中を隈なく探したが、どうしても居らなんだ。穴の口の樣子では、二疋や三疋は間違ない筈だが、それでは今日は穴の口に圍ひをして置いて、明日も一度來て見ようと圍ひの支度にかゝつた處へ、丁度見物に來た男があつた。そこで其迄の經過を話して見たところ、其男の言ふには、昔から狸は燻せば出ると言ふから、試しに燻し立てゝ見たらどんな物かと言ふ。何だか當にならぬやうにも思つたが、他に好い方法も無いので、其に決めた。枯葉を掻集めて、上に杉の青葉を載せて、煙をドン〳〵穴の奥へ煽り込んでやつた。一方拔穴でもあつて、煙の出る道でもあるかと、一人が見張つて居た。すると物の二分間も經たぬのに、ヒョツコリ煙の中から狸が飛出して來たさうである。直ぐ用意の刺股で押へつけて掴まえてしまつたが、只不思議でならぬのは、それ迄狸が果して何處に隱れて居たか、いくら考へても判らぬと言ふのである。

同じ男の話であるが、その前、別の山で狸を掘つた時の事ださうである。凡そ六分通りも掘つたと思ふ時分、もう一疋飛出して來た。直ぐ持つて居る鍬で撲りつけると、コロリと死んださうである。そこで肢を縛つて、傍の木の枝に吊して置いた。未だ二疋や三疋はたしかに居ると、更に穴を掘りに掛つたさうである。其時穴を掘りながら傍に吊してある狸を見ると、何だか繩が切れさうで、危なかしくて仕方がない。そこで相手の男を顧みて繩を代へてくれと言ふと、よしと答へて直ぐ狸を下して繩を解いたさうである。その時代りの繩を取つてくれと言ふので、一人が鍬の手を休めて、脇に置いてあつた繩束を投げてやつた。それを相手が手を伸べて受止める、其瞬間だつたさうである。繩を受取る爲ヒョイと手を伸した隙に、死んで居た筈の狸がムツクリ起上るが否や、手の下を掻潜つて飛び出した。ソレッと慌てて追掛けたが、もう間に合はなんだ言ふ。狸はもう何處ともなく逃げてしまつた。何にしてもホンのちよつとの隙で諦められなんだと言ふ。

隨分ひどく撲つてたしかに死んだと思つたが、矢張嘘死だつた。それにしても吊してある繩が氣になつたのが、そも〳〵恠しかつたと不思議がつて居た。

死眞似か氣絶か、狸にはよくある事ださうである。

二　狸の死眞似

よく言ふ狸寢入りは、ほんとの狸には未だ聞いた事が無かつた。然し死眞似をする話の方は、狩人に聞いても確にあると言うて居る。早い話が山で狸を追かけて、ドンと一發喰はした時、コロリと見事に引くり返つた時などは、中々油斷が出來ぬさうである。獵犬に追かけられた時でも、犬が追ついて一嚙み當つたと思ふと、もうグタリと參る事がある。そんな時に限つて隙を窺つて居るので、犬でもうつかり遁す事があると言ふ。然し老巧な犬は、矢張それをよく知つて居て、決して油斷をしないとも謂うた。

鳳來寺村峯の、音何とかいふ狩人だと聞いた。或時分垂（ぶんだれ）の山から追ひだした狸を、田の中へ追込んで、獵犬を向けると、直ぐ咥へて來たさうである。其狸を家へ持つて來て、土間へ轉がして置くと、犬が傍に座つて番をして居たさうである。すると、其時ちよつとの間背戸へ用足しに出て歸つて見ると、犬が門口で狸と嚙合つて居る。見る見る犬が咥へて振殺してしまつたさうであるが、若しも其時犬が居なかつたら、遁してしまつたらうと謂ふ。

又同じ村の或男は、擊つて來た狸を土間に置いて、爐邊に坐つて、飯を食つて居た。すると戸の外に繫いである犬が頻りに吠え立てるので、格子の間から覗いて見ると、死んで居た筈の狸が、そつと頭を持上げて居る。此奴嘘死だなと思つて、エヘンと一ッ咳拂をすると、慌てゝ又候クダリとしてしまふ。そして暫く經

つて四邊が又少し靜かになると、狸がそつと細目を開けて樣子を窺つて居る。エヘンと又一ッやると、慌てゝ眼を閉いでしまつたと謂ふ。

又瀧川の某の狩人は、椎平（しひだひら）の山で、狸が山のタワを遁げる處を擊つと、飛上つてコロリと轉がつたさうである。それを家へ持つて歸つて、半日土程間の天井へ吊して置いてから、下して皮を剝ぎに掛つた、そして背中を半分剝ぎかけた時、急に何か用事が出來て、狸を其處へ置いたまゝ、隣の部屋へ行つた。するとその狸が、背中を半分剝がれたまゝで、ノソ〳〵這つて背戸口から外へ遁げ出した。其處へ折よく家内の者が來て、大騷ぎをやつて、捉へた事があつたと謂ふ。

鼠などにはよくあつた。長押の上を走る處を、箒で拂ふと、バタリ落ちて來る。尻尾の先を掴み上げて、表の端迄持出して、其處に置くか置かぬ間に、チョロチョロと遁げてしまつた。これなどは、一時氣絶して居たと言へば言へるが、背中を半分剝がれてから、初めて正氣づいたとしては變な譯だ。さう言つて、それ迄

死眞似して居たとすると、えらい辛棒强い事である。

然し何れにしても、如何にも狸らしい遣方ではあつた。

三　狸の穴

狸の穴に注意して居る者は、山の外觀を一渡り見たゞけで、其處に穴があるかどうかゞ直ぐ判ると謂ふ。多く雜木山の、餘り深くない、峯から少し降つた邊りが、狸の好く處だと謂ふ。

貉（まみ）の穴などもさうであるが、狸の穴には、必ず澤谷の水のある處へ向けて、細い徑が出來て居る。朝晩定めて通ふ譯でもあるまいが、綺麗に叩き土のやうになつて居た。尻尾の掃木で撫でゝ通るなどゝも言うた。穴には水を求める徑がある

一方便所がある。狸の溜糞と言ふ程で、穴から數間離れた位置に、一ヶ所に夥しく積んである。時折位置を替へるらしく、古い糞の跡が、其方此方にある事もあつた。果して居るか否かは、此糞の樣子からも判別したのであるが、時に依つて、二日三日位留守にする事もあるといふから、糞が新しいだけでは狸の有無は未だ決められない。

狸の穴

穴は、入口から少しは入つた處が、最も狹いさうである。それからは段々奥へ進むに從つて廣くなつて、最後に枯葉や枯草を深く敷き詰めた處がある。こゝが

寢床で、大きい穴になると、疊二疊敷位は珍らしくなかつた。或は又穴の模樣に依つて、寢床の奥に、更に一段高い處が設けてあるのもある。これは濕氣の多い時の用意と謂ふ。雨の劇しく降つた後などは、寢床に一面水が溜つて居る事もあつた、さうした時の爲めに、必要だつたのである。

狸の穴狩は、口元から縱に段々掘つて行つて、中から飛出して來る處を、豫め用意した木の刺股で押へるのである。然し犬が居れば、中へは入つて咥え出して來る。此場合には、大きな犬は駄目である。然し一ッの穴に二疋も三疋も居る時は、犬も容易に咥え出す譯にはゆかぬさうである。

狸の穴では、一ッの穴に一疋と言ふ事は滅多に無い、大抵二疋以上居る。多いのになると、六ッ七ッ位迄居た話がある。それが貉となると、より餘計居るさうである。マミツトオと言うて、貉は一ッの穴に十居るものだなどゝも言うた。

狸は冬至十日前に穴へは入つて、八十八夜過に穴から出ると言ふ。その期間な

ら間違なく穴に居たのである。然し穴狩などする者は、入口に茅の葉など挿して置いて、その靡き振りで、果して居るか否かを知る事もあつた。

以前は狸の穴を見かけても、よく〳〵手輕にゆく場所でない限り、手を出さなんだが、近頃では見つけ次第に、一日二日を費しても掘つてしまつた。岩などを利用した堅固な穴でも、ダイナマイトなどで碎いて捕つてしまふ。それで忽ち少なくなつて、近年では、一年にたつた二ッしか捕らなんだなどゝ、村の狸掘りの名人が零して居たものである。

自分の家の近くの籔に、昔からあると謂ふ貉の穴があつた。車も通つた程の街道の脇で、まさかもう居なからうなどゝ濟して居たが、近所の者の話では、夕方など其處を通ると、時折見る事があると言ふ。狸なら善いが貉では、竹の根をわけて難儀しても合はんでなどゝ、狸掘り達が言うて居たから、或はそんな事から今もまだ居るかも知れぬ。

四　虎挾みと狸

狸を虎挾みで捕つた時代は、もう三十年も前に通り過ぎて居た。宛もない山へ何程かけて置いても、自體居なくなつたものが、やつて來て掛りやうはなかつた。それよりも後を尋ねて出かけて行けば、間違が無かつたのである。一頃カンシャク玉といふのを嚙ませて捕つた事もあつたが、警察が八釜しくて、直ぐ駄目になつた。

でも虎挾みで捕つた頃には、面白いやうに捕れた事があつたさうだ。背戸の山へ三ッ掛けて、それがみんな外れて居た事もあつた。皮を剝いで軒に吊すか吊さぬ間に、もう皮買が來て買つて行つた。皮の値も今から思ふと其頃は、嘘のやうに廉かつたが、それでも齷齪百姓などして働くより割が宜かつたと、北山御料林下の街道端に、茶店を出して居た爺さんは語つて居た。その頃は、前の畑もたつ

た一枚しか作らなんだ。後は全部ノバコ(草生)にしてあつたものだ。それが狸や狐が段々尠くなるに連れて、少しづゝ擴げて行つて、十年この方は、麥も毎年何俵とか穫つた。五六年前から、田も造つて、去年は米が六俵もとれたと言うて居た。

然し盛に虎挾みを使つた當時は、捕るにも捕つたが、一方隨分馬鹿な眞似をして、んだ詰らぬ目を見た事もあつたと言ふ。見事な狸が掛つて、後肢だけ挾まれて、ピョン〳〵跳ねて居るのを、見す〳〵遁がした事があつた。今思ふと隨分馬鹿氣た譯だが、其時遂妙な氣が出て、折角生きて居た物を、直ぐ撲殺しては興が無いから、一ッ苦しむ處を見物してやれと、腰から煙草入を出して、傍に坐つて悠々煙草を喫み始めた。その時挾まれて居る肢の肉がもう破れてしまつて、中から眞白い筋がはみ出して居た。もうその筋だけで、挾みの鐵に引掛つて居る危ない處だつた。狸がもがいて荒ばれる度に、少しづゝ伸びるのが判つた。それでもまさか遁げようとは思はなんだと言ふ。手前がいくら荒ばれても、もはや遁げられぬぞよと、呑氣に毒づいたものだと言ふ。其の内狸が一段ひどく荒ばれたと思ふと、プスリと音がして、どん〳〵遁げてしまつた。餘り馬鹿々々しくて、遂聲も出なんだと言ふ。筋を引斷つてしまつたのである。

後の挾みを提げて、澁々歸つて來たさうであるが、後になつて其話を狩人の一人にすると、俺も狸ではそんな目に遇つたと、同じやうな事を語つたさうである。して見ると狸には、間々ある事だつたのである。

五　狸を拾つた話

山の中で狸を拾つたからとて、格別珍らしい出來事でもなかつたが、實は狸一

ッ捕るにも容易でなくなつた頃だけに、話の種にもなつたのである。或時村の某の男が、朝早く山田へ麥播きに行くと、途中の田圃の中に、狸が一匹マゴ〳〵して居る。今頃狸の居る筈が無いがと、暫く立止つて見て居たが、紛れもない狸なので、直ぐ引捉へて撲殺してしまつた。見ると眼から眼を擊拔かれた、盲目狸だつたさうである。近所で狸を擊ちもらしたと言ふ話も聞かなんだから、餘程遠い處からでも迷つて來たものだらうと言ふ。話はたゞそれだけであつたが、實は其同じ路を、一足先きに通つて居る男があつたのである。拾つた男とは隣同志で、上と下の屋敷であつたが、どうした譯かひどく仲が惡くて、お互に何とか惡口の一ッも言はねば、氣の濟まぬ間柄であつた。而もそれが家ばかりではなく、田圃も隣合つて作つて居たのである。

それで拾つた男は、其狸を擔いで其儘田圃へ行つたが、自分の田へは行かないで、先に來た隣の男の傍へ行つた。さうして出し拔に言うたさうである。道を歩くにも少しは氣を注けて歩けと、拾つた狸を手に吊して見せながら怒鳴つたと言ふ。如何に田が可愛いくても、朝も暗い内から起きて、脇目も觸らずに來るから、こんな禍が落ちて居ても拾ふ事も出來まいと、さう言うたさうである。

あんな無法を吐く奴に遇つては叶はぬと、拾はぬ方の男がひそかに語つたものだつた。如何にも論外の無法に違ひ無かつたが、田舍にはまだ斯うした氣持の人が居たのである。極端に昔風の、狩人にでもあるやうな、特別な氣性から考へると、祭日にも隱れて働き度い程、朝から晩まで仕事に熱中して、少しづゝでも家產を增やして行く男の態度が、けなるいなどと言ふ氣持でなしに、度し難い馬鹿者のやうにも見えたのである。まつたく狸一匹が、米一俵近い値にもなつた年だつたから、禍運とも何とも言ひやうはなかつた。折角先に通つても、拾へないやうな者は馬鹿者に違ひなかつたのである。

話がまた狸へ戻るが、狸は時折人家の軒などへ、手負になつて迷つて來る事が

あつたさうだ。或家で朝早く戸を開けると、表の端に狸が一匹、ヨチ〳〵歩いて居る。見ると犬にでも嚙まれたか體中血だらけにして、人が近づいても遁げる力も無かつたさうである。道がに其家では殺し兼ねて、折角の福を近所の若い衆に與つてしまつたと云ふ。

六　砂を振りかける

狸は人を嚇す時に、尻尾で人の頭を撫せたり、後から砂を振りかけると謂うた。鳳來寺道中の、追分の出離れの分垂橋の袂を通ると、狸が尻尾で頭を撫でると專ら言うた。それが或は事實であつたかと此頃になつて思ふ事がある。橋の袂に赤松が五六本立つて居て、中に一本道の上へ幹が差出したのがあつた。もう三十年も前であるが、村の某の狩人が、暮方通りかゝると、犬が上を向いて頻りに吠え立てたさうである。もう暮方ではあるし、其まゝ通り過ぎようとしたが、餘り吠え方が劇しいので、上を仰ぐと、其横態になつた幹の上に、狸が上つて居たさうである。直ぐ撃殺して提げて來たが、思ひ掛けぬ事だつたと語つて居た。

八名郡大野から遠江へ抜ける途中の、須山の四十四曲りの坂へは、狸が出て通る人に砂を振りかけると言うた。それで夜分など滅多に通る者もなかつたさうである。或時大野の者が、須山から日を暮して來て四十四曲りにかゝると、後から少しづゝ砂を振りかけるものがある。初めは左程氣にもせなんだが、段々氣味惡くなつて、足を速めると尙盛にかける。果はおそろしくなつて、どん〳〵駈け出すと、駈ければ駈ける程益々盛んになる。夢中で坂を駈け崩れて來て、途中の人家へ飛込んださうであるが、後になつて考へると、自分の穿いて居た草履が跳ねる砂だつたと、果は大笑ひしたさうである。然しこんな話は別として、四十四曲

りの或個所では、現に小石混りの砂を振りかけられた者も、大野町にあつたと言ふ。又某の修驗者は、其處で狸に化かされて、一晩中山をうろついて、須山の村で借りた提灯は骨ばかりになり、自分の着物も殆ど滅茶々々に引裂いて、體中を茨掻にして、朝になつて歸つた事があつたと言ふ。修驗者を化す程の狸なら、砂をかける位は、朝飯前の仕事だつたかも知れぬのである。

七　狸と物識り

貉の皮を狸と間違へて買つた話がある。えらい山の中などで、よくある手だと言うた。板に張つて吊してあるのを、何も知らぬ町育ちの行商人などが、何の皮だ成程こりや狸だねなどゝ、お愛想のつもりで言ふと、ア、狸だが幾何かに成らぬかいなどゝ、空恍けて居る。何だ此爺狸の相場を知らぬのかと、遂ムラ〳〵と慾が出て、狸でその値なら安い物だ、如何にもこんな山の中では、世間の相場は知るまいなどと一人極めして、慌てゝ金を拂つて擔いで來た。お前マミ(貉)の皮を買ふかいなどゝ、途中で話しかけられて、ギョッとしたと謂ふ。貉では狸の皮の十分一にもならなんだのである。何處から買つて來た、ア、又彼奴に欺されたかなどゝ笑はれて、泣き出す者もあつたさうである。それでも未だ諦め切れないで、狩人といふ狩人の家へ、一々寄つて訊いたさうである。幾何でもいゝから、其處らに置いて賣つておくれと、投げ出して行く者もあつたと言ふ。

貉と狸とは見た目で直ぐ判つたのであるが、それは狩人の話で、素人には容易に判らなんだと言ふ。さうかというて狩人でも、判らぬ場合も又あつた。

狸だ貉だと散々爭つた末に、村の物識りの處へ擔ぎこんだ話がある。その物識りと言ふのが盲目だつた。座敷に寢て居てさう言うたさうである。肢にアカギレ

があるかやと、さう聞かれて見たら如何にも肢の裏にアカギレがあつた。そんなら狸だぞよと、寢て居て見分けたなどゝ言うた。その變な物識りは、十七の年に眼を患つて、廿歳の時には皆目見えなんださうである。それで居て村の事なら何んでも知らぬ事は無かつた。目が見えなくても山の地境や地形迄、不思議な程よく知つて居た。何處の山にどんな石のある事迄知つて居た。あの人が眼が見えたらと、惜まぬ者は無かつたと謂ふ。それで居て晩年は殊に氣の毒だつたさうである。女房に死別れてから、後添を迎へたが、その女との間に娘が一人あつた。間もなくその女房は恐ろしい癩病が出て、村で作つた山の中の小屋で死んださうである。その後娘が十三の年に、罪業障滅の爲とあつて、連立て廻國に出たさうである。四國八十八ヶ所から、奥州の鹽竈迄廻つたと言ふ。最後に村へ歸つた時は、江戸の雉子橋御門の中の長屋で、遇へぬと思つた從弟に遇つて來たと言うて、ひどく喜んでゐたさうであるが、それから間もなく死んだと言ふ。その娘も癩病の母を持つたゝめに、可哀相な身の上だつた。ひどく親思ひの娘だつたといふが、十三の年から廻國をし通して、どうした事情であつたか、十七の年に美濃の岩村で、雪の中に凍えて居たと言ふ。それが廻國の姿であつたさうだ。助けられて家へは歸つて死んだとの話だが、もう百年近くも前の事である。

八　狸　の　火

狸が矢張り火を點すと謂ふ。青いとも又赤い色をして居るとも謂つて、定つて居ないやうである。然し一方には、狸の火は赤く、狐の火は青く、天狗の火は赤くて輝きがあるなどと尤もらしく語る者もあつた。山の陰には入つても、木立の下へかくれても、同じやうに見えて居たと言ふ者もある。

長篠の醫王寺から、横山の方へ向つて、山を越して來て、長篠の本街道へ出る辻のあたりは、よく狸が出て嚇す處と聞いたが、又其處で火を點すとも言うた。

山路をダラ〳〵降つて來て、本街道の辻へ出ると、前が寒峽川の廣い谿で、谿の彼方に、大海や出澤の村の灯がチラ〳〵見える。更に行手には横山の村の火も見えた。狸や狐の火でなくとも、淋しい感じのしたものである。又時とすると、遠くの鴈望山のあたりへも、チラ〳〵見える事があつた。自分が小學校を卒業する年には、夜學に通つて毎夜其道を通つたもので、坂を降つて來て向ふの火を見た時、ハッとした事はある。さうかと言うて一度もそれらしく思ふものを見た事はなかつた。

或は又、丁度その邊りから、怪しい人影が、後や先に隨いて來る事がある、こつちが止れば向ふも止り、急げば急いで、村の入口迄來て消えるなどゝも謂うた。現にさうした經驗をした者が、自分の訊いたゞけでも何人かあつた。某の男が遇

つた時は、村の入口の橋迄來ると、ドン〳〵脇へそれて、川の中へは入つてしまつたと謂うた。

自分が子供の頃だつた。其處で怪しい者に遇つたと言ふ男が、夜中に大戸を叩いた事がある。近所の村の物持の主人だつた。何でも其處へかゝつた頃から、前に立つて影のやうに歩いて居る者があつた。村の入口へ來ても中々姿を消さないで遂にお宅の前迄來たと言ふ。これから又山を越して歸る氣にはなれぬから、どうか泊めて貰ひ度いと言うて居た。それも矢張り狸の惡戯と言ふ。

或は又、さうした場合、狸ならば最後に姿を隱す時、えらい音をさせて消えるから判るともいふ。

九　呼ばる狸

正月薪刈りなどに行つて、山の上で一人働いて居ると、何處ともなくホイと呼ぶ聲がするさうである。雨にでもなりさうな、トロンとした溫かい日などに多かつた。又女が一人で居たりすると、きまつて呼ぶと云ふ。ホヲイと、さう思ふ所爲か、何だか出ない聲を無理に絞り出すやうにも聞えるといふ。

こちらが鉈でタン〳〵と木を伐ると、向ふも同じやうな音をさせる、ザーッと木を倒すと、矢張させた。明るい、日がカン〳〵照つて居る時だといふ。誰だと呼んで見ても返事がなくて、暫くすると又ホイと呼ぶ。氣味が惡くなつて歸つて來たなどと言ふた。さうかと思ふと、一人で炭など燒いて居ると、間近の山の陰などから、笛の音や太鼓で、如何にも賑やかに囃し立てゝ近づいて來る。今一息で、あの曲り角を出るかなどゝ思ふと、フイと消えてしまつたりする。みんな狸

の惡戯だというて居る。

狸は人を呼びかけて、それをきつかけに、段々呼交して、相手が負けたら喰はうといふ。それで夜中にうつかり返事は出來ない、返事をしたが最後何處迄もやらねばならぬといふ。夜中に一人で居る時に、遂騙されて返事をしたばつかりに、自在の茶釜を飲干しても足らなんだなどゝ言うた。長篠村吉村の寺屋敷の裏の家では、家内三人で代る〳〵返事して、やつと負けずに濟んだ。或は返事の代りに木魚を叩いて夜を明したが、朝見たら軒下に恐ろしい古狸が、腹を上にして死んで居た話もあつた。

瀧川の奥の大荷場の一ッ家では、近くのむくろじ谷に居る狸が、毎晩惡戯をして仕方がない。そしてシンゾの藤兵衛ボットボトというてからかつた。藤兵衛も負けては居ず、さう吐くお主もボットボトというて、一晩中呼ばり通して、朝見たら軒下に大狸が死んで居たと言ふ。此大荷場は一ッ家で、而も藤兵衛が一人者

の處から、狸と呼ばり合つて暮して居るげななどゝ、惡口にも語つたのである。

鳳來寺の奥の院などで、夏分雨乞のあつた後には、夜になつて定つて、同じやうな笛太鼓の音がしたと言ふが、此方は狸とは言はなんだ。天狗の所爲だといつて居る。雨の降る晩などに、ボトボトと聞えたのが、狸の腹鼓であつた。そんな晩に、坂を登つて行くと、御坂の脇で彼方でも此方でも、ボト〳〵やつて居たといふ事である。

十　眞黑い提灯

狸の話では、何と言うても化け話が多かつた。これは現に生きて居る某の實話で、某が四十五六の折の事だつた。

錢龜（ぜにがめ）（東鄕村大字出澤（すざは）字錢龜）の行者下へは、毎度狸が出て、人を嚇すといふ噂があつた。縣道に沿つた僅かな家並で、籔陰の日もろく〳〵當らぬやうな處だつた。居酒屋が一軒あつて、近所の者がよく酒を呑んで居て、夜遲くなつてから、谿を隔てた自分の家などにも、醉どれの唄が聞えたものである。其處の家端れから、一町程離れると昔の村境で、道上の岩の上に、椹か何かの大木が道に被さりかゝつて、根元に行者の石像があつて、馬頭觀音や六地藏なども祀つてあつた。道下は目の下に寒峽川を覗くえらい谷だつた。

或晩其處を通りかゝると、向ふから眞黑い提灯が一ッ來たさうである。その提灯と摺れ違ひざま、ヒョイト先方の顏を見ると、白髮頭のひどい婆さんだつたハテ見た事も無い人だがと思つて、直ぐ後を振返つて見たが、もう提灯も婆さんの姿も見えなんだといふ。その時は身内がゾク〳〵としたさうである。すると今度は行手の道に、長々と寢て居る獸があつた。犬のやうでもあり、又狐だか狸だ

か、薩張り得體が判らない。不思議な事にその獸が、餘り大きくもないのに、道一ぱいになつた事である。跨いで通るのも氣持が惡いので、暫く立止つて思案したが、結局尾の方をソッと通り拔けたさうである。すると急に四邊が眞暗になつて、一歩も前へ進めなくなつた。うつかりすれば、一方の谷へ落ちる心配がある。仕方が無いので度胸を据へて其處へ踞みこんだ。さうして腰から煙草入を出して、一服喫ひかけたといふ。その間に前の方を、見るともなしに見ると、どうやら白いものがぼうッとある。段々見て居る内、氣が附くと、それが行手へ續いた街道だつた。空を仰ぐと星がカラリと出て居る。遠くの山も見えて、川瀨の音も聞える、まるで夜が明けたやうで其儘家へ歸つたが、それからは何事もなかつたさうである。

二十年ばかり前の事である。狸の惡戯だというて居るが、其處へ出るのは或は幽靈だと言ふ說もあつた。村でたしかに死んだ筈の人が、其處を通つて行く姿を見たといふ者も段々あつた。現に九十幾つで死んだ婆さんが、杖に縋つて來たのにたしかに遇つたと言ふ者もあつた。して見れば狸の惡戯というたのは、狸の爲には或は寃罪であつたかも知れぬ。然し又一方では、此處から山續きのフジウの峯の狸が、數町離れた算橋の籔下とへ、交る交る出るともいうた。

算橋は家が二軒しかない部落で、道下がずつと田面になつて居た。其處へも矢張婆さんに化けて出たと言ふ。或夜更けに、出澤の者が飛脚に行くと、其處を前に立つてゆく婆さんがあつた。眞暗い夜にも拘らず、着物の唐棧の縞柄が、ハッキリ讀めたと謂ふ。瀧川(たきがは)の入口の、大荷場川の橋の袂まで行くと、其處から川の中へ、飛込んでしまつたと謂ふ。

この話は狸でない事は判つて居るが、以前近くの淵で、砂利運びに雇はれて居た女房が、乘つて居たカモ(筏の一種)から落ちて溺れて死んだ事があつた。その女房が溺れた時の姿で、忙しさうに田面を道の方へ來る姿を、たしかに見たとい

ふ者があつた。乳呑兒を遺して氣の毒だと專ら噂のあつた際だつたから、或はさうした幻を見たのであらうが、場所は矢張同じだつた。

十一　鍬に化けた狸

自分が未だ五ッ六ッの頃だつた。街道端に茶店を出して居た一人者の婆さんが或雨の降る晩、追分から家へ歸る途中、北山御料林下の土橋から、下の谷へ轉がり落ちて死んだ事がある。何でもおきよ婆さんとか云つて、相當小金も貯めて居たと言ふ話だつた。傘を差したまゝ死んで居たさうである。狐が突落したと云うたが、近くの盗人坂の狸の仕業とも言うた。

盗人坂は追分の村端れだつた。どうしてそんな名をつけたか知らぬが、村を出離れて北山御料林の、暗い森の中へは入らうとする入口で、今は道路改修で坂は無くなつたが、以前は崖に沿つた險阻な坂で、かつて馬方が落ちて死んだ事もあつたりして、狸が出なくても、充分淋しい處だつた。日暮れに其處を通ると、きつと狸が出て惡さをすると言ふ。村の某の男だつた。暮方通りかゝると、未だ人顔の判る時刻であつたが、道のまん中に大男が立つて居て、それがどつちへ廻つても通れぬやうに邪魔をする。大抵の者なら怖れて遁げたのだが、血氣盛の剛膽者だけに、此奴と云ひながら、力任せに胸元を突退けた。すると男の姿は消えてしまつて、何かカタリと音がして倒れた物があつた。氣がついて脚下を見ると、鍬が一挺倒れて居たと言ふ。大方誰かゞ置忘れた物だらうが、それを狸が利用して人間に見せたものだと言ふ。

これは其坂が無くなつて後の、明治四十年頃の話である。追分の某が、他所村へ田植の手傳ひに行つた歸りに、そこの手前迄來ると、何處から出たか一人の怪

しい影が先に立つて行く、變な事だと思つて居ると、木立を出離れる處で立止つて動かなくなつた。某も少し氣味が惡くなつて、其處に止まつて眤と樣子を見て居ると、その怪しい影が段々山の方へ寄つて行つて、最後に崖へはり附いてしまつた。それでやつと歩き出したが、傍を通る時見ると、もうその姿は無くなつて何か黑いものが、氣の所爲か見えたと言ふ。未だ人顏の判るメソ〳〵刻だつたさうである。其時直ぐ後からやつて來た者があつたので、訊いて見たが、その者は一向氣がつかなんだと答へたさうである。勿論此話は、狸とも何とも言ふ譯では無かつた。

盗人坂の狸は、とくに狩人が擊殺してしまつて、今はもう出ぬとも謂うた。その狩人が煮て喰つたが、古狸で肉がこはくて、薩張り美味くなかつたと言ふ。肉がこはくて美味くなかつたとは、古狸を退治た話に、必ず附いて廻る文句だつた。何處其處の狸を擊つて煮て喰つたが、おそろしく肉がこはかつたなどゝ、よく言うたものである。

十二　狸か川獺か

狸が出たからとて、必ずしも其處に棲んで居るとは決つて居なかつた。自分の村の上の端れへ出る狸は、山續きの倉木の山から通つて來ると謂うた。化けたと云ふ話は餘り聽かなんだが、時々えらい音をさせて通る人を嚇すと謂うた。

村端れだけに、街道脇に張切りの松といふのがあつた。赤松が蛇のやうに街道の上へのたり掛つて居た。傍には馬頭觀音や愛宕神などの石像が並んで居た。道の下手に辨天を祀つた小さな池があつた。夏分は其處で雨乞ひなどしたものである。或時某の男が夜遲く通りかゝると、竹を一束擔いで來て直ぐ脚下へ投げ出し

たと思ふやうな、えらい音をさせたと謂ふ。男はそれに驚いてそのまゝ引返して來て自分の家へ泊つていつた。或大工は、黄昏時に弟子と二人で通りかゝると、張切りの松の上から、眞白い獸が道下へ向けて飛び込んだ。すると續いてえらい音がしたさうである。誰でも此處へさしかゝると、ボンノクボ(項)がゾク〳〵すると言ふ。村の物持の某は、日が暮れるともう其處を通れなんだ。その爲め生涯通らずに終つたとも聞いた。村の者ばかりでない、反つて他所の者が氣味惡がるとも言うた。誰の話を聞いても、此處で嚇されたのは、定つてえらい音だつた。それで一方の說では、どうも狸では無いらしい、川獺では無いかというた。辨天の池から、山を少し下ると、寒峽川の鵜の頸といふ淵がある。其處から川獺が上つて來て、遊んで居るのが、人の通りかゝつたのに驚いて、池の中へ飛込む、その音ではないかと言ふのである。

何にしても氣味の惡い處だつた。或男が日暮方に通りかゝると、道の脇の石に腰をかけて居る人があつた。傍へ寄つて見たら、それが男だか女だか、又前向きだか後向きだか薩張り判らなんださうである。

何も此處に限つた譯ではないが、眞夜中などより、却つて日暮方の方が氣味惡かつたさうである。ぼんやり人顏の見える時刻が、不思議な事が多かつたと言ふ。

十三　娘に化けた狸

鳳來寺村門谷の、高德(かうとく)の山に、柚が小屋を差して居た時の事だと謂ふ。その小屋には三人泊つて居たさうであるが、或晩一人が山を出て、門谷の馴染の女の許へ寄つて遊んで來た。すると其翌る晩三人が爐に向つて居ると、だしぬけに小屋

の垂莚を上げて顔を出した者があつた。見ると若い女で、而も一人が前夜寄つて來た馴染の女だつた。へゝゝと笑つて居たさうである。どうも恠しい、これはてつきり狸の惡戯に違ひないと覺つて、それでも面白半分にからかつて見た。お前はどこだいと言ふと、俺や門谷の田町だと答へたさうである。田町の誰だいと言ふと、へゝゝと笑つて口を押へて居る。丁度その時皆んなして鳩を燒いて喰つて居たので、喰はんかいと言うて一串差出すと、默つて受取つて喰つてしまつた。それなり娘は歸つて行つた。翌晩も同じやうにやつて來たさうである。三日目の晩に、小屋の入口へ鳩の肉を餌にして虎挾を仕掛けて置くと、翌朝一匹の古狸が掛つて死んで居た。それきり娘はもう來なんだ。後で其狸を煮て喰つたが、矢張りこはくて美味くなかつたと言ふ。

娘に化けた譯ではなかつたが、鳳來寺村長良の村端れの谷に出た狸も、狩人の掛けた虎挾に掛つて、以來出なくなつた。それ迄は崖の上から砂を振りかけたり、石地藏に化けたりして、通る者を惱ましたと言うた。

狸が石地藏に化けた話は未だあつた。化けたと言ふよりも、使つたと言ふ方が適當だつた。出澤の村から谷下へ越す山の途中に、村雀と言ふ神樣があつた。その傍に鉢冠り地藏と言ふがある。その地藏が時折化けて通る人を嚇した。矢張狸の仕業と專ら言うた。或月夜に村の開原某が通りかゝると、地藏がゲラ〳〵笑ひ出したさうである。兼て覺悟をして居たので、腰の刀を拔くや否や斬りつけて、其儘歸つてしまつた。翌朝行つて見ると、地藏が胴を眞二ツに斬られて居た。そのまゝ今に胴中から二ツになつて立つて居る。それ以來もう化けなくなつたさうである。

別の話では、鉢冠り地藏は狸の仕業でなくて、地藏自身が化けるのだとも言うた。何れにしても、たしかに俺が化けたと名乘る譯でないから、遽かにどつちとも決められない。

十四　狸の怪と若者

自分の村の池代の山の大窪には、えらい古狸が棲んで居て、地續きの深澤の橋へ出て、通る者を嚇すとは專ら言うた事である。恰度村の中程で、上と下の組の間の谷に架つて居た橋である。もう二十年ばかり前であるが、橋の近くに住んで居た某の男が、夜更けに一人歸つて來ると、橋の欄干に坊主が一人凭れて居たが、それが見る見る大きくなつたのに、膽を潰して遁げて來たと言うた。

村の某の家の者であるが、五十年ばかり前、夜分此處を通りかゝつて、狸に嚇されたのが因で、死んでしまつた話がある。未だ宵の口だつたさうであるが、橋の近くにあつた家へ、血相變へて駈込んで來たと言ふ。よく〳〵物の怪を見たと見えて、戸口でハアッと言つたぎり、土間へ倒れてしまつて、後は口ゝ利けなんださうである。其夜は其處へ寢かして、翌日家へ連れて行つたと言ふが、四五日して息を引取つたさうである。病んで居る間も、絶えず怖がい怖がいと言ひ通して居たと言ふが、果してどんな怪を見たことか、家人が堅く祕して居て一切他人には話さなんだといふから判らない。未だ二十かそこいらの若者で、極く實直な男だつたさうであるが、何でも下の村に馴染の女があつて、其處へ通つて行く途中だつたとも言うた。三州横山話にある、老婆を殺して山へ持つて行つたのも同じ狸の仕業と言ふ事である。深澤の橋には、クダ狐も出ると言うた。或は又其處で幽靈に遇つたと言ふ者もあつた。極く新しい話で、近くの家に葬式があつて、暮方村の者が橋を行つたり來たりして居た、そこへ一人が橋の袂迄來ると、土手に男が凭りかゝつて此方を見て居たが、通り過ぎて振返つて見ると、もう影も形も無かつた。大方幽靈だらうと言うて、大騒ぎをやつたさうである。

村を出離れて、長篠へ越す途中の、馬崩れの森は、田圃を三四町過ぎた處に、一叢大木が茂つて居て、日中でも薄氣味の惡い處だつた。こゝからずつと長篠の

入口迄山續きになるのである。此處にも又惡狸が居て、通る者を時折嚇すと言うた。或は又山犬も惡い狐も出ると言うて、何れにしても問題の場所だつたのである。自分などの此處を通つた經驗でもさうであるが、暮方など未だ明るい田圃道から、暗い森の中へ足を運んで行と、地の下へでも入るやうで自づと心持迄滅入つて來る。又反對に暗い森の中から、田圃道へ出るとホッとするが、それだけに何だか後から引張られでもするやうに不氣味を感じたものである。そんな譯でもあるまいが、田圃の手前の、村の取付にある家へは、以前は夜分眞蒼になつた男が、時折駈込んで來たさうである。

或男は暮方森の手前に差しかゝると、一町程前を、太い尻尾を引ずつて、狸が歩いて行くのを見たが、道の中央でくる〳〵廻り出した、そして道下へ飛込んだと思つたら、娘になつて上つて來たなどゝ、狐にでもありさうな事を言うて居た。某の又修驗者は、夜更けて一人行くと、行手を豆絞りの手拭で頰被りをした男が、鼻唄で行くが、どうも樣子が怪しいと思つて、一心に九字を切ると、果して道下の池へ飛込んだと、眞面目になつて語つたものである。

これは自分の祖母の話だつたが、父が未だ少年の頃で、夜遲く二人で通りかゝつた時、恰度森の中程で、何か怪しいものを見たと言ふ。大方狸の惡戯だらうと云うたが、何を見たのか、それ以上聞いても話さなかつた。

十五　塔婆に生首

狸の出たといふ場所が、申合せたやうに、村端れや境で、塞の神や道陸神を祀つた跡であるのも少し氣になり出した。この話もさうした場所での事である。

長篠の醫王寺の近くにあるノッコシの山は、以前から古狸が棲むと言傳へた處

だつた。水上（みづかみ）の部落と、長篠の本郷とを境した、ちよつとした窪合の峠で、道が三ッ辻になつて居た。暮方其處を通ると、道に何やら汚ない袋のやうな物が落ちて居るが、うつかり拾つてはならぬ、狸のきんたまで、化かされるなどゝ聞かされたものである。道を挾んで古木が茂つて居て、辻には石地藏が立つて居た。

近所の若い衆が此處の山續きで狸の穴を見つけて、遊び日に掘つて居ると、其處へ醫王寺の和尚がやつて來て、皆の衆ご苦勞と言うて去つた。それが實は穴の主の狸が化けたので、何時か拔穴から遁出して、若い衆をからかつたのだと言うた。或は又その折好い天氣だつたが、急に雨が降つて來て、皆が濡れしよぼれて掘つて居る處へ、和尚が傘を差して來て笑つたげな、村の某もその一人だつたげなどゝ、眞しやかに聞かされたものである。

自分には祖父に當る人の事だつた。或時長篠の本郷から日を暮して、此處へ差しかゝると、どう道を間違へたのか、醫王寺の方向へ降るのを、ドン〳〵脇へ外

れて行つて、氣が附いた時は、山續きの村の卵塔場へは入つて居た。前に新佛の墓があつて、白張の提灯と新しい塔婆が立つて居る。見るとその塔婆の尖端に、男の生首が突通してあつて、目を開いたと思ふと、クスリと笑つたさうである。祖父は平素から剛膽な人だつたので、それを見ると、初めて狸の惡戯と氣がついた、何だ手前の相手などして居られるかと言置いて、其儘後も見ずにドン〳〵卵塔場を出て來たさうである。それから家へ歸り着く迄、もう何事も無かつたと云ふ。此話は祖父が若い頃幾度も物語つたさうであるが、自分は祖父の妹に當る人から聽いた話だつた。

ノツコシの峠近くの家では、夕方狸に化かされて、此處の山へ連れ込まれる者が、度々あつたと言ふ。そして又夕方などに其處を通りかゝると、何處からともなく、負んでくれ負んでくれと呼ぶ聲がするとも言うた。内金（うちがね）の某の男は、或晩醫王寺の方へ向けて峠を越して來ると、突然暗の中から負んでくれといふ聲がし

て、何やら背中へ負さりかゝつた物があつた。男は怖ろしさに夢中で、其まゝ馳け出したが、醫王寺の明りが見える處迄來ると、フッと背中が輕くなつたやうに思つたと言ふ。内金の村の左官の某の話であつた。

此處の狸は、もうとくに狩人が撃殺してしまつて、其後出るのは、山續きの吉村から通つて來るのだともいうた。さうかと思ふと、いや未だ居る、現に誰それが化かされたなどゝ言ふ。さうかそれぢや撃たれた奴は別の狸かなどゝ、話が又新しくなつて來た。すつかり噂が根を斷つて終ふのは、容易ではないのである。

長篠の本郷と内金との境にある、施所橋の上へは、晩方狸が化けて出ると專ら噂した。雨の降る晩、傘を差して先へ立つて行く男が、フイと後を振返つた顔を見たら、三ッ目の大入道だつたとか、又或男が夜更けて通りかゝると、橋の欄干に寄りかゝつて居た男が其儘下へ飛下りて行つたとも言うた。而も此橋などは、橋の袂に迄人家があつて、狸の出る噂の場所はほんの五間か七間の處だつた。狸

が出るには、必ずしも人家を離れた場所といふ必要もなかつたらしい。

十六　緋の衣を纏つた狸

三河の伊良胡岬の丁度中央頃、田原の町からは南に當つて聳えて居る山を、御津の大山と謂うて、岬中では第一の高山であつた。此山の大久保の谷には、昔から惡い狸が棲んで居るとは專ら言傳へて居た。未だ古い出來事ではないと聞いたが、山の南方に當る福江村の者が、朝早く山を越して仕事に出ると、定つて行衛が判らなくなる。それが村の者だけではない、旅商人などで日を暮して通りかゝつた者が皆目知れなくなつた事もある。或時は葬式歸りの和尚と小坊主二人が、日暮に山に掛つた儘知れなくなつた。それが或時、行衛の判らなくなつた者の、

身に附けて居た手拭が、血に染つて山の途中の木の枝に引掛つて居た事から、何か山の怪の禍かも知れぬと言ふ事になつた。それで村中評議の上山狩りをする事になつて、その中の一隊が、大久保の山深く入込むと、一ヶ所未だ誰も知らぬ岩窟があつて、その奥に大きな狸の穴を發見した。然もその手前に、嘗て行衞を失つた者の履物が片方落ちて居た。愈々此穴が怪しいとなつて、穴の周圍に矢來を結つて置いて掘りにかゝつた。おそろしく深い穴で、三日續けて掘つて、やつと最後の穴の奥へ掘り當てたと言ふ。中は廣さ八疊敷程もあつて、その奥に更に一段高い處がある。見ると緋の衣を纏つた大狸が、人々の立騒ぐのを尻目にかけて、端然と坐つて居たさうである。村の者も一度は驚いたが、此奴遁すものかと、何れも寄つて集つて撲殺した。然し狸は觀念した樣子で、些しも荒れ狂ふ事は無かつたと謂ふ。傍にはそれ迄狸の餌食になつた人々の、衣類や骨の類が堆く積んであつた。其時狸の着けて居た緋の衣は、葬式歸りの和尚のものであつたと言ふが、それ以來大久保の山には、何の禍も無くなつたと謂ふ。此話は豐橋の町の或婆さんから聽いたが、本人は土地の者から直接聞いたと言うて居た。

緋の衣は着て居なかつたが、狸が人を殺して喰つた話は、未だ他にも聽いた事がある。自分等が子供の頃など、狐と狸と何れが恐ろしいかなどと比較論をやつて、狸は人を殺して喰ふから怖ろしい、狐は只化したり憑くだけだなどゝ言うたものである。その時分聞いた話で、八名郡鳥原(とりはら)の山でも、狸の餌食になつた者があつたと專ら噂した。

狸が人を取り喰らつた話の一方には、女を誘拐して女房にして居た話がある。寶飯郡八幡村千兩(ちぎり)の出來事であつた。娘が家出して行衞が知れなくて、方々探して居ると、近所の病人に狸が憑いて、俺が連れて行つて女房にして居ると言ふ。場所はこれ〳〵と、村の西北に聳えて居る本宮山の裏山に在る事を漏したので、初めて、山探しをして見ると、果してえらい險しい岩の陰に居たさうである。其

處は雨風など自然に防ぐやうに、出來て居る場所だつたと言ふ。後になつて娘に樣子を問ひ訊すと、狸だか何だか知らぬが、山の木の實や果物の類を、時折運んで來て食はして呉れたと語つたさうである。その娘は平生から、少し足りぬやうな樣子があつたと謂ふ。此話は自分が十二三の頃、隣村の木挽から聽いた話である。

十七　狸寄せの話

以前は村々の若い者が五六人集ると、コクリだの西京鼠、其他狐や狸を寄せて、慰み半分に遊んだものであつた。中でも狸寄せは、最も早く亡びて、後には滅多にやる者は無かつたと謂ふ。格別方法が面倒と言ふ譯でもなかつたから、矢張流行だつたのだらう。寄せる方法の大體を言うて見ると、目隱しをさせたり、白紙を仕扱いて幣帛の代りに持たせる事などは、他の神寄せ狐寄せの類と變りはなく只呪文が少し異つたゞけである。左に呪文の全部を掲げて見る。

テンニトロ〳〵　チニトロ〳〵
アサヤマハヤマ　ハグロノゴンゲン
ダイミヤウジン
オイサメ　メサレ　オイサメ　メサレ

只これだけの文句を、寄る迄は何回でも繰返すのである。狸が寄ると言ふ前後の狀況を言うて見ると、最初被術者の顏色が、段々蒼白くなる。續いて呼吸が急しくなるにつれて、今度は顏色が次第に上氣して、殆ど眞赤になる。さうなると體中が劇しく震へて、時々坐つた儘踊り上るやうになる。此時は、狸が道中を急いでやつて來る處だなどと謂ふ。其處を過ぎると、再び顏から段々血の氣が薄ら

いで行つて、最後に眞蒼になると、體が急に落込んだやうに、小さくなつてしまふ。斯うなるともう狸が寄つたのであるから、そろ〳〵問答を初めてもよいのである。勿論これは村の若い衆のやつた方法で、或時旅の行者が狸を寄せた時は、呪文や方法が全然異つて居たさうである。

寄つた狸を歸す時は、背中に犬の字を書いて、最後の點を強く打てば、それで好いのであるが、此方法を怠つたり、或は目隱しの手拭が自然に解けたゝめ正氣づいた時などは、後になつて近所の子供や老人に憑いて困つたさうである。その事に付て或老人の話に據ると、事が了つてから、自分の子供に憑くと見えて夜泣をして仕方がなかつた。抱いて居ればさうでもないが、床へ寢かすと、體が急に强直して、火のつくやうに泣き出す、それで來る晩も來る晩も、女房と交る交る抱いて居て夜を明す。さう〳〵家の中にも居られぬので、外に出て子供を搖り搖り歩いて居たが、或時などつく〴〵狸など寄せるものでないと後悔して、子供と一緒に泣いて歩いた事もあつたさうである。其間には、種々な魔除けの方法などもやつて見た、短刀をそつと枕邊に置いて見たり、神社の御符を布團の下に敷いて見たり爲たが、一向効めは無かつた。その内ふツと思ひ出して、山犬の上顎で造つた根附を出して來て、布團の下へ入れると、それなり嘘のやうに夜泣きが止んでしまつたと謂ふ。以前は山犬の上顎を乾上げた物で、根附を作つて魔除けとして持つて居る者がよくあつたのである。顎の内部を紅く漆塗りなどにして、腰に下げて居る人を、現に自分なども見た事があつた。

狸寄せなども盛に方々でやつて居た頃は、譯もなく寄つたさうであるが、一度流行しなくなつてからは、容易に寄らなんだとも謂ふ。コクリなどもさうであつた。流行して居た頃は、面倒な手數を掛けないでも、酒の席で慰半分に箸を三本結へて立て、上に皿を冠せて唱へ言をすると、それでもう膳の上をヨチ〳〵動き出したさうである。あのよく寄つた時分には、狸なども其處いらにどれ程でも遊

んで居て、こちらが寄せるのを待つて居たかも知れぬなどゝ、眞面目になつて話した老人もあつた。

十八　狸と印籠

狸から福分を授かつたと謂ふ類の話が、極く微かではあつたが遺つて居た。長篠村大字富榮字富貴の某家には、昔し諸國行脚の狸から讓られたと謂ふ一個の印籠があつた。諸國行脚の狸はちと恠しいが、大方僧侶に化けた狸の事でもあつたらうか。その爲め家が永く富み榮えて、家數三四戸しかない僻村を、富貴と呼んだのも、その家に依つて出來た名と謂うた。その印籠が轉々して今は近くの村の物持の家に祕藏されて居る。從つて代々の持主であつた家も、早昔の面影が無くなつて居るのは是非もない事だつた。その印籠は、仔細あつて自分も一度見た事がある。黑塗りの中は粗末な梨地に塗つてあつた。惜しい事に蓋は久しい前に失つたとかで見當らなかつた。打見た處では、格別狸が呉れたらしい處もない、只の印籠である。妙な事にその印籠の由來について、別に柳生十兵衞が武術修行の折に、遺身に置いて行つたとも言うて居る事であつた。狸と柳生の劍術使ひと、何の緣故も無さゝうなのに、どうしてそんな說が出來たかは判らない。

富貴の村から、谷一ッ越えた長篠村内金には、文福茶釜を持傳へると言ふ家があつた。街道からは山寄りの、村人が入りと呼ぶ家で、正福寺と謂ふ古い禪宗の寺の門前に屋敷があつた。つひ先代迄は村一番の物持で、兼て村の草分けでもあつた。文福茶釜の由來として言傳へて居る處では、先祖が正福寺のずつと以前の和尙から讓られたもので、その茶釜のある爲めに永く福運が續いて來たと言ふだけである。昔話にあるやうに、狸が化けた類の話は、自分は未だ聽いた事がない。